日本、惜しくも最下位

優勝は地元のルーマニア

第2回世界女子ハンドボール選手権大会



（大会のポスター）

第二回世界女子ハンドボール選手権大会は7月7日から15日までルーマニアのブカレスト、ウラソフ、シビウ、プロイエスチ市などで行なわれ、ルーマニアが初優勝した。日本は第一次リーグのB組に出場し、7日ハンガリーと対戦して17—8で惜しくも敗れた。9日にはデンマークと対戦、初の勝利をめざして健闘したが、12—7と再び敗れて準決勝リーグ進出への希望を断たれた。日本は西独、ポーランドとともに7、8、9位決定戦にのぞんだが、西独、ポーランドに敗れて最下位となった。なお日本チームは帰途フランスに立ち寄ったあと、7月27日夜羽田着のフランス航空機で無事帰国した。

初戦ハンガリーに苦杯

第一次リーグ

（B組）

▽日本対ハンガリー（7月7日、ウラソフ市トラクター競技場）

（右側が前半）

ハンガリー 17（11—5 / 6—3）8 日本

▽評　午後6時30分ハンガリーのスロー・オフで開始。ハンガリーは日本ゴール前でローリングパス、30秒ハエクネ・アグネスが左からロング・シュート。これが見事決まる（ハンガリー 1—0）。日本もすぐ速攻をかけ、ボールを早く回して青木—宇井—山崎から西村に渡りシュート。ハンガリーは長身ぞろいで西村のこのシュートをうまくカットした。3分またもハエクネ・アグネスが右サイドから左サイドに走り抜け、左サイドいっぱいの地点からシュート（ハンガリー 2—0）。4分日本はハンガリーのゴール前で激しいローリングから西村がアンダー・シュートして1点をあげた。

（ハンガリー）

		S	得	反
GK	ホルドネ・マリア	0	0	
	ハンタシュ・アグネス	1	0	
	チェルハイネ・イローナ	3	2	
	バルガ・シュショ	4	2	
	バログ・マルタ	3	1	
	シュッツ・ユデト	3	1	
	ロムハチネ・マリア	9	4	
	ヨナ・マグダ	5	2	
	ハエクネ・アグネス	6	5	
	オランネ・エバ	0	0	
	ローテルネル・アンナ	0	0	
	計	34	17	15

（日　本）

		S	得	反
GK	篠崎	0	0	
〃	山田	0	0	
	沢田	4	1	
	磯部	6	2	
	青木	5	0	
	山崎	1	0	
	宇井	6	2	
	西村	19	3	
	田村	0	0	
	黒川	2	0	
	太田	0	0	
	計	43	8	7

ハンドボール「第11号目次」

表紙写真—世界選手権大会最終戦日本対西独戦から…左上写真は日本チームの入場式のもよう。

（ハンガリー2—1）。4分20秒マルタが右サイド45度の角度からシュート（ハンガリー3—1）。6分まで互いに速攻の連続だったが得点なし。6分10秒沢田—青木とパスし、これを西村が右から流れてきてアンダー・シュートし（ハンガリー3—2）1点を争う好ゲームを展開した。日本はよく走りよく守った。ハンガリーはこのあたりからサイドからサイドとボールを広く回し、日本はカットのチャンスがなかった。7分シュショ、R・マリアにシュートされ（ハンガリー5—2）、このあともR・マリアに2点、ハエクネ・アグネスに1点をとられた（ハンガリー8—2）。日本も磯部に打たせ、13分ロングシュート、14分アンダ・シュートを決め(ハンガリー8—4)と迫った。ハンガリーは少しもスピードが落ちず、16分、17分、18分とたてつづけにゲット（ハンガリー11—4）した。タイムアップ寸前西村がロングシュートして前半は11—5。

後半ハンガリーのデフェンスは荒くなり、4分、5分に宇井が7メートル・スローを決め（ハンガリー11—7）て観衆を大いにわかせた。日本の善戦もこれまで。ハンガリーは6分、8分、11分、12分とゲットし、15—7と大きくリード。勝負の大勢はほとんど決定した。13分沢田がポストから倒れ込みシュートして得点したが、ばん回するに至らなかった。

沢田主将の話　バックのチェンジが悪かった。日本の攻撃は横走りになってパスミスが目だった。それが相手の得点につながった。

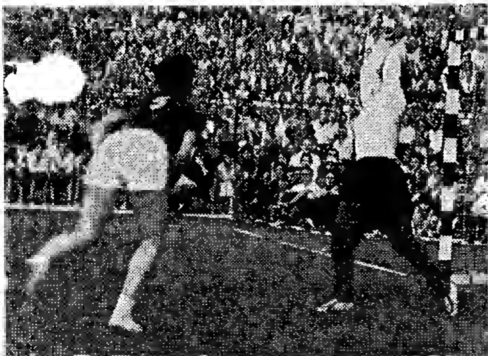
▽デンマーク対ハンガリー（7月8日、ウラソフ市トラクター競技場）

デンマーク 8（5—1、3—3）4 ハンガリー

後半急追むなし デンマーク戦

▽日本対デンマーク（7月9日午後6時30分、シビウ市ルチャーフル競技場）

デンマーク 12（7—4、5—3）7 日本



決勝＝デンマーク対ルーマニア戦

（日　本）

		S	得	反
GK	山田	0	0	
〃	篠崎	0	0	
	磯部	15	5	
	青木	3	0	
	山崎	1	0	
	宇井	2	0	
	田村	0	0	
	沢田	3	0	
	太田	0	0	
	西村	7	2	
	黒川	1	0	
計		32	7	28

（デンマーク）

		S	得	反
GK	ヘルガ・ランセン	0	0	
〃	イエンセン・インガ	0	0	
	オステルガルト・アグネス	4	0	
	クリステンセン・アンナ	2	0	
	コッホ・リーゼ	9	3	
	スコット・M・イッテ	3	1	
	ニールセン・アンネマリー	14	4	
	マルシュトランド・ヘンニ	0	0	
	ビッレモーセ・エルゼ	3	0	
	ニールスゾン・クリステン	3	3	
	クラメル・ビルギッテ	3	1	
計		41	12	18

▽**評**　（前半）午後6時30分デンマークのスロー・オフで開始。デンマークはいきなり左45度の角度からリーゼのロング・シュートが右スミに決まった（デンマーク1—0）。日本も1分、2分と続けて宇井—西村の速攻でデンマークのゴールに迫ったが、二度のシュートをGKの好守にはばまれた。デンマークは中央に長身のロング・シューターを二人置き、一人がポストにはいる。そして両サイド深くボールを回して攻撃してきた。4分30秒速攻からイッテに得点され、6分にはアンネマリにポストから得点された（デンマーク3—0）。10分にはリーゼのロング・シュート、11分、12分にはクリステンに倒れ込みシュート（デンマーク6—0）。日本も速攻とボールを左右に早く回してデンマークをゆさぶったが、デンマークのデフェンスは厚く、GKの好守で11分まで得点できなかった。12分黒川—宇井—山崎とボールが渡り、磯部がアンダーシュート。これが見事に決まって日本は1点をあげた（デンマーク6—1）。このあたりから日本は徐々にピッチをあげ、日本のペースで試合が進んだ。速攻の連続でデンマークのデフェンスをゆさぶり、15分磯部のアンダー・シュート（6—2）。18分にはボールを早く回して磯部がロング・シュート（6—3）、20分磯部のアンダ・シュート（6—4）して2点差に迫った。タイムアップ10秒前に右サイドからビルギッテにシュートされ、前半は7—4と



ルーマニア対デンマークの決勝戦

デンマークのリードに終わった。
（後半）開始直後デンマークにカットされてアンネマリーに得点された(8—4)。日本は速攻からデンマークのゴールに殺到したが、不運にもゴールポストに当たりチャンスを逸した。5分左サイドからリーゼのシュート(9—4)、7分ローリングからポストに渡ってアンネマリーのシュート（10—4)。8分45秒に中央から磯部の二段ジャンプ・シュートが決まり(10—5)、この直後デンマークのクリステンが反則して9分間退場となった。日本追加点のチャンス、沢田、西村がノーマークからシュートしたが、ポストに当たり得点ならず。9分デンマークは7メートル・スローで加点(11—5)、11分西村のアンダー・シュートがきれいに決まった(11—6)。12分アンネマリーに得点され（12—6）たが、日本も18分西村—青木—黒川—西村とボールが渡って得点（12—7）したが、遂に時間切れ。日本は第2戦も失った。
このゲームは試合内容の点で最高だった。試合には負けたが、日本は終始デンマークを圧し、五千人の観衆を大いに湧かせた。
前半にもう少し早く調子を出していたら、もっとデンマークを追いつめることができたと思う。
山田副主将の話　監督さんの指示のとおりに、背の高い外国チームに対してアンダー・シュートをよく打った。これで自信がついた。

B組	デンマーク	ハンガリー	日本	試合数	勝数	負数	引分	勝点	得点	失点
日本	●	●	×	2	0	2	0	0	15	29
ハンガリー	●	×	○	2	1	1	0	2	21	16
デンマーク	×	○	○	2	2	0	0	4	20	11

日本女子チーム遠征成績一覧表
（7勝8敗1引分）

		日時	スコア	チ　ー　ム	場　　所	
1	△	6.23	8—8	ベルリン選抜	ベルリン	西独
2	●	24	4—12	ドイツナショナル	ハノーバー	
3	●	26	7—13	ドイツナショナルチーム	ブッペタール	
4	○	28	14—6	メッチンゲン選抜	メッチンゲン	
5	○	7.1	16—7	南バーデン	ジンゲン	
6	●	4	3—26	ルーマニアナショナル	ブカレスト	ルーマニア
7	○	6	16—13	トラクター	ウラソフ	
8	●	7	8—17	ハンガリー	ウラソフ	世界選手権
9	●	9	7—12	デンマーク	シビウ	
10	●	11	10—16	ポーランド	ブカレスト	
11	●	12	6—15	西　独	ブカレスト	
12	●	18	17—18	シビウ	シビウ	ルーマニア
13	○	19	7—5	ファイアンツア	シギショアラ	
14	○	20	10—6	メディアス	メディアス	
15	○	22	18—6	テキステラ	セントゲオルゲ	
16	○	25	18—8	パリ選抜	パリ	フランス

○＝勝ち　●＝負け　△＝引き分け

反則続出のポーランド

7、8、9位決定リーグ

▽日本対ポーランド（7月11日、プロエスチ市ペトロール競技場）

5、6位決定戦＝ハンガリー対ソ連

ポーランド 16（9—7, 5—5）10 日本

（ポーランド）	S	得	反	（日本）	S	得	反
GKグニーダ・アネマリー	0	0	0	GK篠崎	0	0	0
ズワボフスカ・アンナ	6	2	8	〃山田	0	0	0
ミハレスカ・ユータ	6	5	6	山崎	3	1	1
ドボラ・ブロニスラバヌ	4	3	12	磯部	0	0	2
ガブリス・マルゴルリアータ	6	2	5	沢田	3	2	1
ドウダ・エバリーナ	6	1	3	青木	6	0	2
ソワダ・アニエラ	2	0	1	宇井	5	4	4
シャルロッテ	0	0	0	黒川	1	0	3
ペルナ・アンナ	0	0	0	田村	0	0	1
コラルチック・テレーザ	3	3	4	太田	1	1	1
リンタ	0	0	0	西村	8	2	3
計	33	16	39		27	10	18

▽**評**　「勇敢に戦うチーム」のニックネームをいただいた日本チームは、この日は全く不調で期待はずれだった。ポーランドのチームはプレーが荒く、特にデフェンスの荒っぽさは、いままでのチームには見られなかったほどである。反則は日本18に対してポーランド39である。ポーランドのスロー・オフで開始、ポーランドは3分ロング・シュート、4分カットから速攻をかけて2



ルーマニアのGK



同　上



チェコのGK

ゴールキーパー三態

—0とリードした。5分日本は速攻をかけてシュートしたが、ポーランドの荒いディフェンスにつぶされた。結局7メートル・スローをあたえられ、宇井が決めて2—1。6分ローリングから沢田がロング・シュートを打って2—2と同点。ポーランドも7分、8分、9分と矢つぎ早やに決めて5—2、11分太田が左45度からのロング・シュートで5—3と迫った。日本はこの日ポーランドゴール前に無理に突っ込んでつぶされ、これがポーランド逆襲の足がかりとさせてしまった。ポーランドにノーマークをあたえたのも無理な突っ込みがわざわいしてしまった。16分に2点を入れられて7—3、19分西村のミドル・シュート、宇井の7メートル・スローで7—5と2点差にしたが、ここで前半終了。

後半日本はボールを早く回し、沢田がいきなり切り込んでシュートしたがポーランドの反則、宇井が3本目の7メートル・スローを決めて7—6と1点差にした。日本は速攻をかけたが、ポーランドの荒いプレーにはばまれてカットされ、逆襲された。3分、4分、7分、10分、11分とたて続けに打たれて12—6となった。後半は全くポーランドのペースになり、日本は思うように走れず、攻撃も断片的になった。12分にやっと山崎がシュート。12分40秒に宇井の7メートル・スローで12—8としたが、ポーランドのスピードは少しも落ちず、その後も得点されてしまった。

世界選手権大会順位

① ルーマニア
② デンマーク
③ チェコ（前回優勝）
④ ユーゴ
⑤ ハンガリー
⑥ ソ　連
⑦ ポーランド
⑧ 西　独
⑨ 日　本

宇井選手の話　防御が荒く簡単なクロスで抜けるにもかかわらず、ボールを持ちすぎた。また中にはいりすぎて攻撃がつまり、これがシュートに結びつかなかった。

西独の速攻に4連敗

▽日本対西独（7月12日、プロエスチ市ペトロール競技場）

西独 15（7—1 / 8—5）6 日本

▽評　西独のスロー・オフで開始。スローオフからローリングされて45秒にブルマイスターに先取点された。これは見事なバック・シュートである。5分西村のアンダー・シュートがGKの左下に決まって1—1。7分、9分西独はポストプレーからバック・シュートして西独が3—1とリードした。13分磯部がシュートしたが、カットされて得点にならず。西独は速攻からミドル・シュートを多く用いていた。日本は先日の対ポーランド戦と同じように動きが鈍く、チャンスをつくれなかった。前半は西独のペースだった。後半も10分までに西独が4点を入れ、日本も田村が2点をあげて11—3、勝負はここではっきりした。あとは日本がどこまでやるか。12分、13分、14分に西村が一人で3点を入れて大いに気勢をあげたが、時すでに遅かった。これで日本は世界選手権に4戦4敗。日本は初出場ながら実力以上のプレーをし、各国の役員から「日本は恐るべきチームだ。一、二年後には相

（西　独）

		S	得	反
GK	ハーラッハ・クリスタ	0	0	
	ホーランド・バルトランド	6	3	
	ブルマイスター・ウルスラ	8	3	
	ゾンレビッチ・ウタ	6	1	
	ブハイト・アニタ	4	1	
	バルンス・クリスタ	3	2	
	ヘルテル・エルスベータ	8	3	
	フォン・ドリス	2	1	
	プロミエス・マリエルイゼ	2	0	
	フリース・ヘルデー	1	0	
	計	40	14	21

（日　本）

		S	得	反
GK	山　田	0	0	
〃	篠　崎	0	0	
	沢　田	2	0	
	磯　部	3	0	
	青　木	0	0	
	山　崎	0	0	
	宇　井	1	0	
	西　村	14	4	
	田　村	3	2	
	黒　川	0	0	
	太　田	0	0	
	計	23	6	18

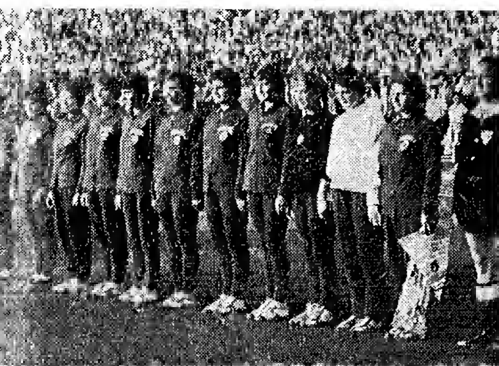
当なチームになる」と言われた。

西村選手の話　第4戦ともなると疲れがでてきた。監督さんの指示どおり動けなかったのが残念です。また西独のポスト・プレーに、あまりにもこだわりすぎたためか、ロングを打たれてしまった。

▽ポーランド対西独（7月13日、プロエスチ市ペトロール競技場）

ポーランド　5（3－3、2－1）4　西独

(7〜9位決定)	ポーランド	西独	日本
ポーランド	×	●	●
西独	○	×	●
日本	○	○	×
試合数	2	2	2
勝数	2	1	0
負数	0	1	2
引分	0	0	0
勝点	3	2	0
得点	21	19	16
失点	14	11	31



優勝したルーマニアチーム

第一次リーグ

（A組）＝プロイエスチ＝

ソ連　11（7－6、4－2）8　西独

西独　7（3－1、4－6）7　チェコ
＝引き分け＝

チェコ　16（6－1、10－4）5　ソ連

(A　組)	チェコ	ソ連	西独
チェコ	×	●	△
ソ連	○	×	●
西独	△	○	×
試合数	2	2	2
勝数	1	1	0
負数	0	1	1
引分	1	0	1
勝点	3	2	1
得点	23	16	15
失点	12	24	18

（C組）＝ブカレスト＝

ルーマニア　9（4－3、5－1）4　ポーランド

ユーゴ　5（3－1、2－1）2　ポーランド

ユーゴ　3（1－2、2－1）3　ルーマニア
＝引き分け＝

注＝順位のなかで「勝点」というのは前半、あるいは後半をリードして試合が終了したとき「勝点1」があたえられる。前半、後半の両方をリードして勝ったときは「勝点2」があたえられる。

(C　組)	ルーマニア	ユーゴ	ポーランド
ルーマニア	×	△	●
ユーゴ	△	×	●
ポーランド	○	○	×
試合数	2	2	2
勝数	1	1	0
負数	0	0	2
引分	1	1	0
勝点	3	3	0
得点	12	8	6
失点	7	5	14

準決勝リーグ

▽A組

ルーマニア　9（4－4、5－3）7　ハンガリー

チェコ　6（4－3、2－1）4　ハンガリー

ルーマニア　7（3－1、4－2）3　チェコ

（順位）①ルーマニア、②チェコ、③ハンガリー

(A　組)	ルーマニア	チェコ	ハンガリー
ルーマニア	×	●	●
チェコ	○	×	●
ハンガリー	○	○	×
試合数	2	2	2
勝数	2	1	0
負数	0	1	2
引分	0	0	0
勝点	3	2	0
得点	16	9	11
失点	10	11	15

▽B組

ユーゴ　10（3－2、7－3）5　ソ連

デンマーク　10（6－1、4－3）4　ソ連

デンマーク　7（3－4、4－1）5　ユーゴ

（順位）①デンマーク、③ユーゴ、②ソ連

(B　組)	デンマーク	ユーゴ	ソ連
デンマーク	×	●	●
ユーゴ	○	×	●
ソ連	○	○	×
試合数	2	2	2
勝数	2	1	0
負数	0	1	2
引分	0	0	0
勝点	3	3	0
得点	17	15	9
失点	9	12	20

5、6位決定戦

（7月14日）

ハンガリー　12―10　ソ連

3位決定戦

（7月15日）

チェコ　6（5－2、1－3）5　ユーゴ

決勝戦

（7月15日）

ルーマニア　8（5－2、3－3）5　デンマーク

ルーマニアが初優勝

×　×　×　×　×

親善試合では7勝4敗1分け

第2回世界女子選手権大会に出場した日本代表チームは大会前に西ドイツ、ルーマニアで、大会後もルーマニア、フランス各地で親善試合を行なった。

西ドイツ

▽第1戦（6月23日、ベルリン・ラートテンバー・スタジアム）（右側は前半、左側は後半）

日本 8（2―2 6―6）8 ベルリン選抜
引き分け

▽**試合経過** 女優の新珠三千代さんが観戦。観衆はわずか五百人だったが、全員初の国際ゲームとあって力いっぱい戦った。記念すべき6月23日である。スローオフ直後沢田がフリースローからGKの右下に先取点をあげ、さいさきよいスタートを切った。初の国際ゲームの最初の1点をキャップテンの沢田があげてくれたことはよい想い出となろう。2分に黒川がローリングのあと、豪快なポストプレーで2―0とリードした。この間ベルリン選抜チームはサムレビッチ、シュトットゲンのコンビで、ポストからリターンでミドルシュートをねらったが、山田の好守にはばまれて得点できず。日本はベルリン選抜の堅いデフェンスにチャンスがつかめず、逆に4分ポストにはいったシュトットゲンが倒れ込んで1点を許し、日本は2―1と1点のリード。12分サムレビッチがミドルシュートを決めて2―2のタイスコア。その後両チームとも得点なく前半を終了。日本チームは日ごろの動きがなかった。これは初の国際ゲームのため堅くなったものである。（スターティングメンバーは山田、山崎、西村、沢田、青木、黒川、宇井。交代選手は山崎、竹本、田村、塚原、磯部）。後半にはいると2分ナヒチガー、4分シュトットゲンに連続ゲットされて2―4とリードされた。日本も沢田がエリア中央から飛び込んできれいに決めて3―4、サムレビッチのシュートで3―5。8分磯部がゴール右下にアンダシュートして4―5と追いあげた。9分ナヒチガーの倒れ込みシュートで4―6、日本はボールを回してチャンスをうかがい12分、13分に磯部が連続シュートをして6―6と再び同点。14分沢田が速攻から得点して日本が7―6再びリードを奪った。試合はシーソー・ゲーム。18分磯部がこの日4点目のシュートを決めて8―7と三度びリードし、このまま試合終了かと思ったが、タイムアップ寸前クラウスの倒れ込みシュートで三度び同点となり引き分けた。

▽**評** 体力の差は目立ったが、走力の点では互角。ベルリン選抜チームのシュートはそれほどスピードはないが、手先で軽くボールを扱うのはうまい。このゲームで日本は細かい動き、フェイントがよかった。世界選手権大会にもじゅうぶん通用すると思う。

山崎選手の話 気分的にあがってしまい、なにもわからなかった。相手が大きいので5―1のデフェンスを敷いた。だからやりにくかった。走力では負けていないと思う。

（日本）		S	得	反	（ベルリン）	S	得	反
GK	山田	0	0	0	GK ドレックスラー	0	0	0
	山崎	1	0	1	ナヒチガー	5	2	0
	西村	3	0	2	コバレスキー	8	0	3
	沢田	5	3	2	サムレビッチ	6	2	0
	青木	1	0	1	シュトットゲン	3	3	1
	黒川	3	1	1	キューン	2	0	3
	宇井	1	0	2	ティーレ	1	0	0
	磯部	15	4	1	クラウス	4	1	1
	竹本	2	0	0	フェンスケ	2	0	1
	深津	0	0	1	クセロ	1	0	0
	田村	0	0	0	ヘンゼル	0	0	0
計		31	8	11		32	8	9

沢田がまた先制点

▽第2戦（6月24日、テクニッヒ・ホッホ・シューレ）

ドイツ・ナショナルチーム 12（10―1 2―3）4 日本

（レフェリー）クロッセン（デンマーク）

世界選手権の得点率

	試合	シュート	得点	得点率
太田	4	1	1	1.000
田村	4	3	2	.667
宇井	4	14	6	.429
磯部	4	24	7	.292
西村	4	48	12	.250
沢田	4	12	3	.250
		102	31	.304

国際試合の得点率（世界選手権をふくむ）

		試合	シュート	得点	得点率
FW	太田	13	21	12	.571
FW	田村	14	39	21	.541
FW	宇井	16	49	20	.408
FW	沢田	16	73	26	.356
FW	西村	15	138	41	.297
FW	磯部	12	75	21	.280
	青木	16	48	6	.125
	山崎	15	14	2	.143
	塚原	9	24	9	.375
	深津	10	10	1	.100
	黒川	16	29	6	.207
	竹本	11	30	6	.200
計			550	169	.307

▽試合経過　観衆千五百人。レフェリーはデンマークのクロッセン氏、前半3分沢田がポストから飛び込んで先取点をあげた。沢田は第一戦につづいての先取点、その後両チームとも動きが鈍く10分まで得点なし。11分ヘルテルがノーマーク・シュートを決めて1—1の同点となった。12分こんどは西村が中央に切り込んで2—1とリードした。18分バルンスのシュートで2—2。19分沢田がリターン・パスからワンドリブルし、飛び込んで3—2と三度びリードを奪った。後半になるとドイツ選抜チームの出足は鋭く、日本は帰陣が遅くなって一方的に敗れた。日本はシュートをしてもすぐ帰陣しなかったのが敗因。ドイツ選抜は速攻のとき以外はかならず飛び込んでシュートしていた。またバックシュートのほかいろいろなシュートを持っている。

▽評　日本は速攻を出せるときは、全力を出して速攻をかけた。審判の動作は日本とだいぶ違うので、ジャッジに対する判断がまずかった。オーバーステップはきびしい。ドイツ選抜チームのシュートは多種多様だが、ボールにスピードがない。しかしタイミングのいいシュートをみせていた。GKの山田、古谷はよく取っていたが、これはスピードがないからである。

（ドイツ）

		S	得	反
GK	アイヘナウアー	0	0	0
	ホーランドキュール	2	1	1
	ブルマイスター	7	1	1
	ブッヘルト	2	1	0
	ヘエアラッハ	0	0	1
	バルンス	10	4	3
	ブレヘンマッヘア	2	1	0
	ヘルテル	4	0	2
	ユッツェンカー	3	2	1
	バウアー	2	2	0
	プロミエス	2	0	1
	計	34	12	10

（日　本）

		S	得	反
GK	山田	0	0	0
〃	古谷	0	0	0
	山崎	0	0	1
	磯部	9	1	4
	沢田	4	2	0
	黒川	1	0	0
	宇井	2	0	0
	青木	6	0	0
	塚原	2	0	2
	西村	4	1	1
	竹本	1	0	0
	太田	0	0	0
	計	29	4	8

後半の反撃も実らず

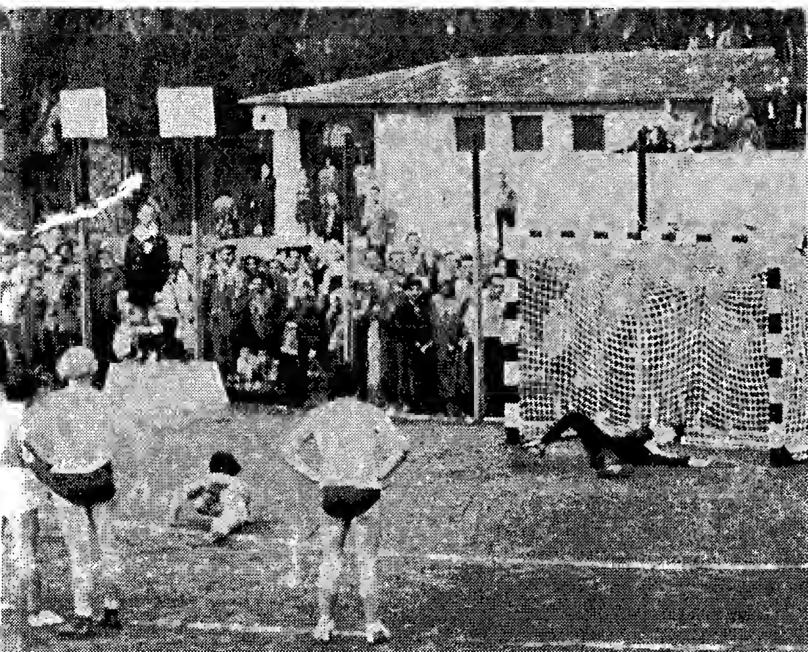
▽第3戦（6月26日、ブッペタール市ヘッキングホイザー体育館）

ドイツナショナルチーム　13（7—2　6—5）7　日　本

▽試合経過　前半2分宇井のキャッチミスからドイツに速攻され、ユットツェンカのシュート。しかしこれは惜しくもはずれた。しかし3分再びユットツェンカにドリブルカットから独走を許し先取点を許した（ドイツ1—0）。5分クロちゃんこと黒川のノーマークシュートで1—1。ドイツは速攻の連続で5分スタインカップ、7分ホーランドキュール、8分ブルーマイスター、12分ボアルンスに連続シュートされてドイツが5—1と大きくリード。日本はスピードがなく、ボール出しが悪いうえにミスキャッチが目立った。14分磯部がフリースローからシュートして2—5とした。日本のシュートはバーに当たる不運があった。18分バルンス、19分ブルーマイスターに決められて前半は2—7。ハーフタイムのとき、日本チームは「菩提樹」を全員で合唱し大観衆の拍手を浴びた。後半にはいって40秒ドイツのローリングを田村がうまくカットし、田村が一気にゴールに迫ってシュートに成功。沢田の活躍で9分には9—5と4点差にした。17分をすぎてドイツチームはレッヘ、ボアルンスがシュートし12—6と差をつけられた。日本は19分に磯部がリターンパスからシュートして12—7とした。が、スタインカンプにとどめを刺され13—7で敗れた。

▽評　日本はGKのタマ出しから速攻がなかった。ドイツチームも速攻が出なかった。日本は第一戦、第二戦にくらべ、パスワークがよくなってきた。

青木選手の話　ものすごい大観衆なので、すっかりあがってしまった。ドイツチームはむだな動きがなく、チャンスにはかならず得点していた。ボールのスピードは日本とそれほど差はない。ただドイツ選手はからだが大きいので、ちょっと勝手が違った。いい勉強になりました。



第1次リーグ＝日本対ハンガリー戦、後半宇井の7メートルスロー決まる

（日本）	S	得	反	（西独）	S	得	反
GK篠崎	0	0	0	GKグレシャケ	0	0	0
古谷	0	0	0	ホーランドキュール	1	1	0
山崎	1	0	2	ボアルンス	5	3	7
黒川	2	2	1	ブルマイスター	5	2	1
沢田	8	2	1	スタインカンプ	5	3	4
青木	3	0	1	ヘエアラッハ	1	1	0
宇井	4	0	1	ユッツェンカー	3	2	3
田村	2	1	0	シェーフェル	1	0	1
篠部	9	2	1	シイエーネン	0	0	0
竹本	2	0	2	レッヘ	1	1	0
塚原	0	0	0	コールツェリウス	0	0	0
計	31	7	9		22	13	16

第四戦に初勝利

▽第4戦（6月28日、オットーディッペル・スタジアム、観衆二千五百人）

日本 14（7—2 7—4）6 メッチンゲン選抜

▽試合経過　日本の女子チームが初めて国際試合に勝った。前半2分沢田の7メートル・スローで先行したが、3分GKの防御ミスで1—1。5分青木のパスを沢田がサイドから決め（日本2—1）、7分、9分に宇井が連続シュート（日本4—1）して主導権を握った。11分青木の高めのシュートがきれいに決まり（日本5—1）、このあとは日本が速攻して前半7—2とリードした。後半も日本のペース、15分には宇井の速攻で13—6と大きく引き離して初勝利をおさめた。

（日本）	S	得	反	（メッチンゲン）	S	得	失
GK山田	0	0	0	GKエルカソート・ドルスト	0	0	0
篠崎	0	0	0	ウタザ・ルツマン	9	2	4
山崎	0	0	5	デプネル・アネル	3	0	1
黒川	1	0	1	イングリート・ロッシュ	0	0	1
青木	7	2	1	インゲ・クノリッヒ	8	1	2
深津	1	0	2	フレンワイ・ヨクス	10	2	1
沢田	10	3	5	ブリギャッテ・ケスネル	1	0	0
宇井	3	3	0	ドリス・オスパルト	1	0	0
田村	4	3	0	ゲリタ・フラム	3	1	0
太田	3	3	1	ジークリット・ロイシェ	0	0	0
西村	3	0	3				
計	32	14	18	計	35	6	9

日本堂々の連勝

▽第5戦（7月1日、ジンゲン）

日本 16（3—1 7—2 6—4）7 南バーデン

注＝15分ゲームを3回。

▽試合経過（第一）日本のスローオフで開始、30分南バーデンのゴール前で激しいローリングから田村のジャンプシュートが決まって1—0。1分30秒ノーマークから田村がシュートしたが失敗。5分ボースのポストプレーから、バックシュートが決まって1—1。6分には沢田がフリースローからフェイントシュートを決めて2—1、7分速攻から青木がシュートして3—1とリード。その後は両チームとも得点なし。

（第二）50秒に速攻から田村が先取点、2分フリースローから西村

（日本）	S	得	反	（南バーデン）	S	得	反
GK山田	0	0	0	GKウルズラ・マルテン	0	0	0
〃篠崎	0	0	0	イングリット・ボース	11	3	1
山崎	2	2	2	ドリス・ボルペット	4	1	3
黒川	4	1	1	マリーゼ・クラール	1	0	1
田村	5	3	5	イレエネ・ヘアビエーンバッハ	0	0	0
宇井	2	1	6	カーリン・ドーレンブルグ	3	3	0
沢田	3	1	0	ロズビタ・ブルム	4	0	1
青木	2	0	3	ハイラローレ・バンデルト	1	0	0
太田	0	0	1	ドーウェ・シャンデルマイア	1	0	0
西村	7	4	3	カリスリ・ファイナウア	3	0	0
竹本	2	0	4	バハバラ・ヒュブナウ	0	0	0
礒部	4	2	2	クリステル・マイスター	2	0	1
塚原	2	1	0	ロズビタ・ベンツ	0	0	0
深津	1	1	0	リタ・ウシーレ	0	0	0
計	34	16	27		30	7	7

××××××

海外通信

××××××

第二回女子七人制ハンドボール世界選手権大会はルーマニアがタイトルを獲得

何年か前第一回女子7人制ハンドボール世界選手権大会で、優勝者チェコが発表された時、若いルーマニアチームは最下位にあった。それから四年たって第一回大会のベルグラードでの不幸な敗者ルーマニアはブカレストで彼等の勝利を祝うこととなった。

▽感動的な決勝戦で、北欧の古典的スタイルの代表者デンマークチームは懸命の防ぎょにかかわらず8対5で敗れた。前回優勝者のチェコスロヴァキアはやっと第3位にとどまった。それ以下の順位はユーゴスラヴィア、ハンガリー、ソ連、ポーランド、ドイツ、そして日本である。

▽これは現在まで四回にわたる世界選手権者のタイトルを保持しているルーマニア協会による前例のない成功である。

一九五六年に続き一九六〇年にルーマニアの女子チームは11人制競技の最高の栄冠を獲得し、それにおくれて男子チームは一九六一年にドイツで7人制世界選手権を獲得し世界を驚かせた。そしてこの男子チームは一九五九年オーストリアでの11人制ハ　ボール世界選手権大会の決　、統一ドイツチームと優勝を争いその力を示していた。

選手の素直な喜び、慎重な監督、そしてきびしい訓練がこの異常な発展の基本的原因と見られる。ルーマニアは世界中の全ハンドボール関係者による心からの祝福を受けるに値するものである。

▽またルーマニア協会はこの大会の開催者としてもわれわれの心からの御礼と感謝に価するものである。最初の選手団を乗せた飛行機の到着から、最後の試合の後のスナゴフ湖での楽しい日に至る間の大会参加者の宿泊滞在の一切の問題は模範的に解決された。

「ソ連と日本はもっとヨーロッパと交流する必要がある。」

あちこちでその力量が称えられ、ダークホースとして位置づけられていたソ連チームのプレーを見ることには多くの関心がもたれていた。

ドイツに対する幸運な一勝と明白な敗退を含む四敗という戦績はこの予想を裏切った。ヨーロッパの強力チームとの定期的な交流が国際的に不可欠な経験をもたらすものであるというソ連男子チームに関し言われた見解が女子選手チームについても同様に言えることである。

▽勇ましい日本についても状況は同様である。

日本はこの大会での大きな魅力となっていた。ヨーロッパチ

がきれいなシュートを決めて2―0、3分南バーデンのボールをカットし、速攻をかけて西村が3点目をあげた。日本は速攻の連続をみせて9分までに7―1とリード。南バーデンは9分30秒ボルペットのシュートで7―2。(計10―3)

(第三) 開始直後の15秒に深津が、30秒にドーレンブルグがシュートして1―1。1分30秒に南バーデンが速攻で2―1と初めてリードしたが、日本も速攻。カットインなどで4分50秒には5―3とした。5分50秒ローリングから塚原のクイックシュートで6―4とし、そのまま南バーデンの追撃をふり切った。(日本16―7)

ルーマニア

▽第6戦 (7月4日、ルーマニア共和国競技場)

ルーマニアナショナルチーム 26（13―1、13―2）3 日本

▽試合経過 ルーマニアのボタン・アナは前半大いに活躍し、6点をたたき出した。コンスタンチネスクも3点をあげ、この二人で9点。日本は13分に田村のシュートで1点を報いたのみ。後半2分に磯部、15分に沢田が各1点をあげた。ルーマニアは1分20秒平均で得点する豪快な攻撃だった。

(ルーマニア)

	S	得	反
GKイリーナ	0	0	0
〃 リリアーナ	0	0	0
コンスタンチネスク・M	8	6	3
ボタン・アナ	7	6	2
ヨセフィナ	1	1	1
アントアネッツア	4	1	0
ユディティ	4	4	2
ビクトリア	1	0	1
アウロア	3	1	1
ネメツ・アナ	1	1	1
エデルトラウト	0	0	1
コンスタンチネスク・C	4	2	5
フェリチア	2	1	0
コンスタンシア	0	0	2
アウレリア	1	1	0
エレーナ	2	2	0
計	38	26	19

(日本)

	S	得	反
GK篠崎	0	0	0
〃 山田	0	0	0
〃 古谷	0	0	0
山崎	0	0	0
西村	2	0	2
青木	2	0	1
磯部	3	1	1
沢田	2	1	2
宇井	2	0	0
塚原	0	0	0
田村	3	1	0
深津	0	0	0
黒川	0	0	2
竹本	1	0	3
太田	0	0	0
計	15	3	11



7、8、9位決定戦、日本対西独戦

▽評 ルーマニアのデフェンスはフットワークをたくみに使い、長身を利してカット・プレーに出る。そしてすぐ速攻に移る。男子と全く同じプレーをする。日本の帰陣が早いと見るや、ロング・パス、ロング・シュートを攻めてくる。すばらしいチームだ。シュートのコントロールがよく、記録でもわかるようにシュートの成功率も高い。(シュート38、得点26、率・684)。ルーマニアのデフェンスは一線に並び、このうち一人だけがボールを持つ日本選手をマークする。このあとカット戦法に出るので、日本のFWは全然手が出なかった。力とスピードの差といえる。ルーマニアの役員から、「交代があるときはセンター・ラインから出入りすること」を指摘された(GKも同じ)。またロング・シュートを打てるようにならなければいけないと注意された。

磯部選手の話 ルーマニアの動きが、あまりにも早いので驚いた。ただ走って中へ飛び込もうとしたが、デフェンスが堅くて攻めあぐんだ。

ームの[illegible]ある攻撃に対し、日本はび[illegible]で虚をつくといった一種の気まぐれな競技態度で対していた。日本の強いシュートは――日本は大会中合計31点得点したが――非常に注目された。日本チームは事前に西ドイツに二週間滞在し多くの有用な助言と訓練を受けてくるといった良い考え方を持っていた。

▽日本チームの獲得した最下位という地位は決して不名誉なものではない。日本協会の理事長の高嶋氏は「ルーマニアチームも四年前やはり最下位であったではないか」と言明したが、この談話はハンドボールというものを良く知ってる人にとっては決して軽く聞き流せる言葉ではない。

第一回学生ハンドボール世界選手権大会
―8協会が代表を派遣―

▽7人制ハンドボール学生世界選手権大会に次の八協会が参加を表明した。

ブルガリア、デンマーク、イスラエル、日本、ノルウェー、西ドイツ、スペイン、スエーデン

▽決勝は一九六三年一月一日より六日までスエーデンの南部で行われるが、大学都市として著名なルントがこの大会の中心となるだろう。

▽ブルガリアは未だFIHに加盟してないが、スエーデン学生スポーツ連盟の要請により、FIHはブルガリアの参加に同意した。

(国際広報第三六号(六二年八月)抜すい・ほん訳 境井)

▽第7戦 (7月6日、ブラショフ市トラクター競技場、ナイター)

日本 16（5―7、11―6）13 トラクタ

(日本)

	S	得	反
GK山田	0	0	0
〃 古谷	0	0	0
〃 篠崎	0	0	0
田村	2	0	0
宇井	4	3	1
黒川	1	0	1
沢田	6	1	1
山崎	1	0	2
西村	13	7	1
磯部	3	1	2
太田	3	1	1
竹本	2	0	1
青木	4	2	1
塚原	3	1	1
深津	0	0	0
計	42	16	12

注＝トラクターチームの記録なし。

シビウと大接戦

▽第12戦 (7月18日、シビウ市ルチャーフル競技場、ナイター)

シビウ 18（10―7、8―10）17 日本

(日本)

	S	得	反
GK山田	0	0	0
〃 古谷	0	0	0
山崎	0	0	3
黒川	2	1	6
西村	15	6	10
沢田	5	3	1
青木	2	1	3
宇井	3	2	4
塚原	4	2	4
磯部	3	1	1
太田	0	0	1
竹本	0	0	4
田村	1	1	1
深津	0	0	0
計	35	17	38

(シビウ)

	S	得	反
GKブロース	0	0	0
ホフバウェルト	1	1	3
ダンドレル	2	1	2
キルチュ	5	2	1
タイル	9	5	2
ビルテルメル	11	6	6
シュミット	0	0	0
アドリアシ	0	0	0
ニコラス	0	0	0
ライル	8	3	6
タナッイウ	0	0	0
計	36	18	20

▽評　同点になること9回、まったくの接戦だった。シュート数も日本35、シビウ36で互格。シビウチームはルーマニアの国内選手権保持者である。ナイター設備といっても三本のポールにロープを張り、32個のライトをつける簡単なもの。後半20分西村のシュートで17―17としたが、21分ダンドレルに決められそのままタイムアップとなった。（25分間ゲーム）。

▽第13戦（7月19日、シギショアラ。ナイター）

日本 7（4―1、3―4）5 ファインツァ

（日本）

		S	得	反
GK	古谷	0	0	0
〃	山田	0	0	0
	西村	14	3	9
	黒川	3	0	7
	山崎	0	0	5
	塚原	2	1	3
	青木	1	0	0
	沢田	3	1	3
	深津	0	0	1
	竹本	3	0	3
	太田	2	0	2
	田村	3	1	0
	宇井	4	1	0
	計	35	7	33

（ファインツァ）

		S	得	反
GK	ユーセ	0	0	0
	バルトアゥス	15	3	10
	ヘダ	7	0	6
	ビスリカ	1	0	7
	ジュテラ	1	1	3
	エリカ	3	0	1
	バリア	0	0	1
	マルガレッタ	6	1	5
	マリア	3	0	3
	計	36	5	36

▽評　競技場はアンツーカー、地方都市まで立派なコートを持っている。午後9時30分試合開始、前半2分ルーマニアに先取点されたが、5分塚原のシュートで同点、その後一度もリードを許さず、後半15分西村のシュートで7―4と引き離して勝負を決めた。

▽第14戦（7月20日、メディアス市体操学校、ナイター）

日本 10（2―2、8―4）6 メディアス

（日本）

		S	得	反
GK	古谷	0	0	0
〃	篠崎	0	0	0
	山崎	5	0	5
	西村	13	1	2
	黒川	1	0	5
	田村	6	4	6
	宇井	3	1	6
	沢田	4	0	3
	太田	2	0	1
	竹本	4	1	5
	深津	3	0	0
	塚原	5	2	5
	青木	3	1	1
	計	49	10	39

（メディアス）

		S	得	反
GK	サーラー	0	0	0
	ユリアーナー	0	0	0
	B・マリア	1	0	18
	ロディカ	2	0	4
	エス	13	0	2
	グルトルカ	16	4	3
	エリカ	7	0	4
	V・マリア	3	1	3
	ロザリア	1	0	0
	グニグンテ	1	0	0
	F・マリア	4	1	0
	マルタ	0	0	0
	計	48	6	34

▽評　前半15分まで2―0とリードされたが、16分青木、18分竹本のシュートで追いついた。後半にはいると速攻でルーマニアゴールに殺到、1分宇井、5分塚原のシュートで4―2とリード、その後グルトガルトに2点とられて4―4。12分に西村が決めて再び5―4とリード、13分、14分、15分に田村が一人で3点を入れて8―4とし、そのままルーマニアを押した。

▽第15戦（7月22日、セントゲオルゲ）

日本 18（5―2、13―4）6 テキステラ

（日本）

		S	得	反
GK	古谷	0	0	0
〃	山田	0	0	1
	沢田	4	2	1
	青木	3	0	3
	山崎	1	0	6
	塚原	3	1	3
	宇井	1	1	1
	深津	4	0	0
	西村	8	3	7
	田村	5	1	2
	黒川	5	1	0
	竹本	9	3	11
	太田	9	6	3
	計	52	18	38

（テキステラ）

		S	得	反
GK	・ヘルタ	0	0	0
	ヨルファー	5	0	3
	ウルタ	5	0	4
	ノルジット	12	3	6
	エーシュット	8	0	5
	J・ピイロシュカ	13	1	0
	T・ピイロシュカ	3	0	2
	オルタ	2	0	0
	R・ヘルタ	0	0	0
	ビスラリエ	6	2	1
	ユリアーナ	0	0	0
	計	54	6	21

▽評　ルーマニアの最終戦、出場回数の少ない選手を先発させた。技倆は日本がはるかにまさっていた。前半ミスが多く得点が少なかったが、後半得意の速攻がきれいに決まった。

セントゲオルゲは人口12万の中都市だが、ハンドボールのチームは二百チーム。サッカーに次いで二番目のハンドボール人口である。



日本チームとの対戦を知らせる街頭のポスター、上はメデイアス，下はセントゲオルゲにて。いずれもルーマニア

パリで最終戦飾る

▽第16戦（7月25日、パリ市サンモール体育館）

日本 18（9―3、9―5）8 パリ選抜

（日本）

		S	得	反
GK	古谷	0	0	0
〃	篠崎	0	0	0
	沢田	7	4	5
	磯部	5	2	2
	青木	0	0	1
	山崎	1	0	2
	塚原	3	1	3
	宇井	6	2	0
	深津	1	0	3
	西村	8	2	0
	田村	5	4	3
	黒川	2	0	1
	竹本	4	2	3
	太田	1	1	2
	計	43	18	25

マドリードで国際連盟総会

国際ハンドボール連盟総会は9月14、15日の両日マドリード（スペイン）で開かれ、日本から式場会長、高嶋理事長が出席した。総会の内容は次のとおり。

①キューバを除名し、米国、英国の加盟を保留した。

②チュニス、セネガル、ダアール、シリア、カナダの新加盟を承認した。

③世界男子七人制選手権大会はいままで4年おきだったのを2年ごとに開催、オリンピック開催年とその中間年とする。1965年の大会は1964年とし、以後2年おき。1964年の開催地は東京とプラハ（チェコ）が立候補したが、投票の結果19―6でプラハに決定した。

④1963年の世界男子11人制選手権大会開催地はスイスと決定した。

⑤役員改選
▽会長ハンス・バーマン（スイス）。▽副会長プチ・モンゴメリー（フランス）。▽理事長アルバート・ワグナー（スイス）、▽会計部長マックス・リンケンバーガー（西独）。▽技術委員長エミル・のホルレ（スイス）＝いずれも留任＝

高嶋理事長は9月21日、式場会長はイスラエル経由で同24日帰国した。また欧州の女子チームを視察していた渡辺和美氏（大崎電気社長）も21日帰国。

座談会

防御の強化が課題



出席者

監督	高嶋冽（協会理事長）
ヘッドコーチ	北川浩（熊本市高監督）
コーチ	宮原俊隆（大崎電気女子監督）
マネージャー	塩川安賢（レナウン監督）
選手	西村八千代（大洋デパート）
聞く人	鷲尾武治（共同通信記者）

楽しみ多い日本チーム

鷲尾　今度の遠征は7勝8敗1引き分け。この成績は監督として満足ですか。

高嶋　ちょっと不満足です。あと2勝くらいはする予定だった。つまり16戦9勝7敗くらい。最後の対シビウ戦は、ルーマニアの選手権チーム。点数では負けているが、内容としては完敗ではない。まず第一回の女子を初めてつれて行ったとしてはまあまあ満足していいと思う。

鷲尾　16戦のうち12戦が国際試合で4戦が世界選手権。まず世界選手権からいこう。世界選手権でみごと連敗して最下位。これはやむをえないと思うけれども、これで日本の女子チームはかなり力がついたんではないか。

高嶋　ついたね。正直なところポーランドやソ連には勝てる実力だったと思う。力を出しきれなかったのは、勝負の世界でしかたがなかった。ハンガリー、デンマークとのゲームはウラソフで行なわれ、日本でいうと軽井沢みたいなところだ。そこから翌日バスで八時間から九時間かかって山を降りて、十度くらい違うわけなんだね。選手が全く悪い条件にもってきてポーランドと当たった。それでも選手というものは、これを克服しなければ試合には勝てない。日本のチームはそこまで克服する力がなかった。だからウラソフでポーランドとソ連と当たっておれば、おそらく勝っていたと思う。急激な気候の変化があって大分まいった。ポーランドあたりは最初からブカレストに陣取ってやっていた。その点でも違う。僕は負け惜しみではなくて、ポーランドにはじゅうぶん勝てると思う。日本は順位は最下位だったが、一つも悲観することはない。各国から来た連中は僕の友だちだが、お世辞抜きに四年後の世界選手権は完全に優勝を争うチームになるといっていた。

鷲尾　北川先生は東京での合宿のときに、「この十五人の選手は自分が思っていたような〃夢のチーム〃だ。このチームをつれて行くのは非常に満足だ」といったが、そのチームを引きつれて行っての世界選手権大会、あるいは国際試合で、自分の思っていたようにプレーできたかどうか。

北川　じゅうぶん成果があがった。日本の力が、どのくらいのところに位置しているか計れました。

鷲尾　スピードをつけねばいかんとか、いろいろ技術的なことをやってきたわけですね。それはそのまま出ましたか。

北川　とにかく、スピードがあるということが日本チームの人気のもとであったし、負けてもそれがいわゆる観衆から受けている。観衆から受けるということは日本国内では感じないが、向こうの観衆が非常に目が高いから観衆から受けるか、受けないかということはそのときのスピードが現わす。

鷲尾　外国のチームは日本に比べスピードがないということですか。

西村　スピードがないように見えるんですね。

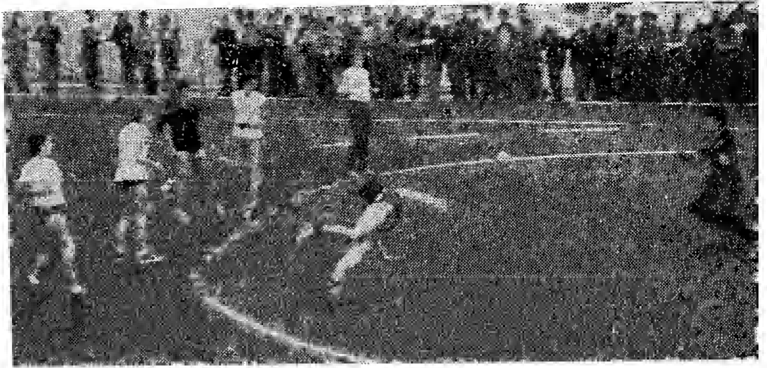
宮原　同じ1メートルのところを外国選手は一歩で行く。日本人は50センチで二回歩くということが速いように見える。同じ距離を移動していますが、それに対する動作がどれだけ小刻みかというわけですね。小さいからそういうのが観衆に速く見えるわけです。

北川　日本が速攻にもってくるのは3秒から4秒だ。外人が速攻をもって攻めるのは1秒から2秒ていどの差がある。日本の方が速い。

高嶋　これは各国の役員が認めている。

防御力が弱い日本

鷲尾　世界選手権の記録を集計してみた。日本の攻撃力は欧州のチームに対して少しも見劣りしないことがわかった。トップクラスでしょう。ところが、デフェンスが弱いために失点が得点の倍なんです。この数字を見てはっきりわかるように日本の防御がいかに弱いか。次の大会までに四年間あるから、これをできるだけ少なくしなければならない。それにはどういうふうな練習方法、技術的なものがあるのか。



高嶋　これはフットワークと、選手が試合全般の動きを見きわめる能力があるかないかということだけだ。つまり極めて技術的なものにはいるけど、防御に対し全員が間隔をあけずにつめて行く。ボールを持ったものに対してはピストン式に前に出るフットワークをつくる。ボールが移ったらすぐうしろに戻りながら、しかもすぐボールの方向へ移行する。そういうフットワークが完全にできれば簡単に点がはいるもんではない。いくら背が高くても。

北川　ハンドボールを始めてから何年の球歴を持っているかということが、大きな差となって現われる。日本はそれが少ない。向こうは国際ゲーム三十何回というように、多くの経験を持っている。もう一つは日本人の持っている国民性ですね。われわれはチームを育てるときに、〃攻撃は最大の防御〃であるということで、攻撃一点ばりです。ルーマニアで格言を聞いたが、「逃げるということは非常に健康的なことである。損だけれども健康的なことである」と考えている。いわゆる防御ということに日本人と外国人の観念的な相違がある。

宮原　外国のヘッドコーチはまずなにをやるかというと、守りを覚えてから攻撃をやる。それでちょうど、攻撃と防御のバランスがとれる。守る方がむずかしい。教えるのに守る方が時間がかかる。これはヨーロッパに共通した考えだ。

鶯尾　そうすると日本のハンドボール界としては、いままで攻撃一点張りだった指導方針を、防御優先というふうに切り替えるのかしら。

高嶋　切り替えなければならないと思う。僕はそう思う。みんなに報告書を書いてもらっている。報告書に基いて日本の体制をもう一回造り直さねばならない。

鶯尾　男子も女子も……。

宮原　そう思います。速攻によると点数にこだわりすぎる。向こうは防御がお互いに強くても得点がはいる。

鶯尾　欧州を見ると攻撃力と、防御力はバランスがとれている。これが数字に現われている。

塩川　デンマークに7点以上とったものは、優勝したルーマニアしかいない。日本が7点、そのほかはみんなそれ以下だ。

西村　デンマーク、ハンガリーが4点。日本が7点。ソ連が4点。ユーゴ5点。ルーマニア8点とっています。日本よりも1点よけいとったところが世界選手権をとっています。

高嶋　攻撃力から見てそれ以下は7点とれないんだ。デンマークが日本とやってメンバーを落したかというとそうではない。青くなって必死にやってきた。ベストメンバーだ。そういうことで攻撃力は自信をもった。

鶯尾　これからは従来の攻撃力の、いわゆる攻撃の指導というのかな。それも続けてやらなければならない。さらに防御の面をいままでの何倍かやらないと、攻撃力と防御力のバランスがとれなくなる。

北川　そういうこと。

鶯尾　これから日本はかなりつらいね。

高嶋　つらいです。いままでの日本のハンドボールは攻撃のすぐれた人は防御がへたくそだ。防御のうまいものは攻撃力がない。そういうような考え方をまず抜かなければならないということだね。

鶯尾　FWもバックもできなければならない。

チーム名	試合数	勝敗数	総得点	総失点	一試合平均得點	一試合平均失點
ルーマニア	5	4勝1引分	36	22	7.2	4.4
デンマーク	5	4勝1敗	42	28	8.4	5.6
チェコ	5	3勝1敗1引分	38	29	7.6	5.8
ユーゴ	5	2勝2敗1引分	28	23	5.6	4.6
ハンガリー	5	2勝3敗	45	41	9	8.2
ソ連	5	1勝4敗	38	56	7.6	11.2
ポーランド	4	2勝2敗	27	28	6.7	7
ドイツ	4	1勝2敗1引分	34	32	8.5	8
日本	4	4敗	31	60	7.8	15

北川　しかもからだがあり、スタミナのあるものをつくりあげなければならない。

鶯尾　むずかしいね。

高嶋　考えればむずかしいが、実際に向こうのゲームを見るとむずかしいとは思わない。僕らが卒直に感じることは、日本の男子が世界選手権をとるよりも、女子が世界選手権をねらう方が早道だということはいえると思う。

鶯尾　ベルリン選抜チームとやって、8対8で引き分けたね。

高嶋　これは勝てたゲームだ。着いてすぐ試合したわけですから……。この中にドイツのナショナルチームの選手が三人はいっている。ドイツのベルリン選抜に8点とれたから立派なものだよ。結局はデフェンス、これもね最後の1分間に……。

西村　1分ないです。30秒前ぐらい…。

高嶋　引き分けにされた。それまではしょっぱなからリードをしていた。要するに、簡単にいうと攻撃力があるから、攻撃力よりも1点少なく守れるチームをつくらねばいかん。8点とれば7点で守れるチームをつくらねばいけない。

鶯尾　そういうことね。

高嶋　選手個人々々にいえば、1点とる選手は0点で守れる力をつくる。5点とれる選手は4点で守れる力をつくらねばならない。これは全体を通じて勝つはずです。ところが昨年男子をつれていった場合もそうです。2点とるやつが4点とられている、攻撃がいくら優秀なプレーヤーでもチームとしては意味がない。

鶯尾　その翌日のドイツ・ナショナルチームとやったときは21―4。

西村　これは強いんです。やっぱりナショナルチームだと思いました。そのときは前半は3―2で勝っていたんですが、これで精魂尽きたというところです。後半速攻で徹底的にやられました。

宮原　日本がボールを出してミスした。そういうので逆襲された。



座談会の出席者左から塩川、宮原、北川、高嶋、西村の各氏。右端は聞き手の共同通信鶯尾記者。

塩川　ドイツのナショナルチームはそういうスキをのがさず絶対に1点にする。そういう点はたしかに違いますね。いわゆる凡ミスを必ず得点に結ぶつける。

西村　ルーマニアに乗り込むまでは、監督さんからドイツチームは優勝候補のトップだと聞いていました。それがフタを開けてみると8位ですから、試合というのはわかりませんね。

鴛尾　二十八日のメッチンゲンでゲームやって14—6で初勝利。このときは？

高嶋　メッチンゲンは州選抜チームなんだよ。日本流でいえば全九州というやつだね。メッチンゲンは小さい町で、皮製品の販売地だね。これは、もう、堂々と勝ったという形だね。

西村　あのときはうれしかったですよ。

鴛尾　ベルリン選抜チームと比べたら落ちる？

高嶋　ちょっと落ちるね。

強いナショナルチーム

高嶋　ベルリン選抜チームはドイツ選手権保持者なんだ。向こうに行って感じることはね、日本なら一つの単独チームで選手権保持者のチームと、ナショナルチーム、いわゆる全日本選抜と大差ない。たとえば男で芝浦工大が全日本とやっても大差ない。しかし、向こうへ行くと、いわゆるナショナルチームというものは全然違ってくる。非常な開きがある。

北川　ナショナルチームというのは、大きな組織によって支えられてるからすごい力を持ってますね。

鴛尾　ヨーロッパは陸続きだから国際ゲームの回数も非常に多く、恵まれているからかなり強い。日本が強くなるにはさっき言ったデフェンスを強化することもあるけど、国際ゲームをどんどんやらなきゃだめですね。

高嶋　それはもう絶対です。だれがどんなことを言おうと、国際ゲームの回数を重ねる以外に選手が強くなる道はない。

鴛尾　さっきも監督が言ったように攻撃力はトップクラス。それがこんどはっきりしているから大きな目標ができたわけだ。この次にはやりやすいね。

高嶋　やりやすいです。そしてこんどのような編成の方法をとれば男子よりも女子の方が編成しやすくなりますね。

鴛尾　どうして。

高嶋　たとえば実業団ということでね。学生なら試験がぶつかるということもあるし……。だからいまの気持は毎年出してやろうというか、連れて行こうという気持だね。

西村　それはぜひやってほしい。

北川　一回きりでわれわれが国に帰ってきて、「すごいぞ、強いぞ」という抽象的な話ばかりやってもだめ。一人でも向こうでプレーを見てきた人たちが多くなってほしい……。自分のポケットマネーをはたいてでも勉強に行く。ハンドボールもそんな時期に来ているのじゃないですかね。

鴛尾　ところで外国へ遠征したのがいいのか、外国選手を日本に招いてやるのがいいのか。どっちだろう。

高嶋　強くなるためには外国に行かなきゃあだめだね。たとえば一つのチームで選手十五人を強くしようと思ったら、本場へ出て徹底したハードスケジュールで試合をたくさんやってくることだ。しかし底辺を拡げてなるほどああいうものだってのを、見せるためには向こうはよくない。だから協会としてはやはり両方並行してやって行かなきゃあならない。

既婚者も多い西独

鴛尾　ダブルかもしれないけど外国チームの特色というか長所と欠点をあげてください。

高嶋　それは塩川君だ。

塩川　まずからだが違う。大きいのは絶対有利ですよね。案外ここが弱いんです（手をあげ、脇の下をさして）。ガードしてるんでも、クロスした瞬間に打つのなんかはいります。結局キーパーが出す体勢がよくわからない。いきなりここから（脇の下をさして）スポッと出てくる。そういうタマに弱い。だから長所が短所になってるんです。日本の選手は全部下から打つんです。下からくるというわけでこうなって下になったところを、こんど上から打ってみるとか、そういうようなことが非常に必要だったわけです。最初はできなかったけど最後になって少しずつできてきたんです。向こうの選手は既婚者が多いですね。

西村　こどもを二人持っている選手が一人いました。三十歳以上の選手もいる。ドイツのブルマイスターさんは三十四歳です。四十三歳の選手もいたはずです。二十七、八歳なんてのはザラですよ。

鴛尾　そうすると日本の女子のハンドボール生命は短いんだね。

高嶋　それは社会的環境なんですよ。日本の女子のスポーツマンは、二十四、五歳になるとオイボレたような顔をしている。これはとんでもない間違いですよ。僕は昔から言ってるんだけど、ハンドボールは少なくとも十年かけないと一人前ではない。



西ドイツチームと交歓する日本チーム

水泳や陸上とは違うんだ。素質があったってキャリアがなければ問題にならない。そういうところからみると、ヨーロッパの生活環境だけど三十歳になろうが、三十五歳になろうがやっていられるというのはうらやましい。

鴛尾　日本でもそういう方向に持って行ったらいい。

高嶋　選手はそういう方向になってきたね。こんど行ったキャプテンの沢田君なんかは、行く前にはことしで引退しようなんて気持でいた。おそらく引退しないでしょう。そこまでやれるという気持になりつつある。

塩川　沢田君なんかいちばん年長でも、向こうに行けば下の方ですよ（笑い）。まだボール磨きのクラスだ。

高嶋　向こうに行っていちばん先に見たルーマニアのスポーツ新聞の見出しに、「日本が非常に若いチームをヨーロッパへ送った」と書いていた。平均年齢二十歳に満たないチームというのは日本だけだ。平均十九・八歳だからね。外国は大体二十四、五歳でしょう。

西村　その次に若いのがポーランドで平均二十二歳くらい。

塩川　球技やるの日本は割に早い。

宮原　ボール持ち始めるのが高校生くらいで十四、五歳でしょう。もっと早いものは中学校ごろからやっている。向こうでは十八、九歳からやりだして二十代ずっとやっている。

塩川　高嶋監督がいうように日本では、ちょうど始めてから十年くらいでピークになるわけ。外国は二十五から二十七、八歳というところが主力で活躍している。それにキャプテンだとか、優秀な選手がその上にいるわけです。その下に若手十八、九歳くらいのがいます。

欧州のコーチは年寄り

北川　われわれが向こうのコーチと別かれるときに「あなたたちは若いコーチなんだからこれからがんばってくれ」っていい

ました。向こうのコーチというのは白髪頭や、ハゲたのもいた。コーチになって三十年、われわれからみるとおじいさんといったのが元気でやっている。

高嶋　それが一線級のコーチだ。

北川　われわれもまだこれからだなと思いましたよ（笑い）

塩川　プレヤーを十五年間やり、コーチに転向して三十年なんてのがザラです。どこの国も同じでした。

北川　日本でいうと団長格というのが、みんなベンチにすわってます。

高嶋　そして選手と一緒にやってる。それが各チームにいるわけです。昔オリンピックの選手だったとか、僕はベルリンオリンピックの選手だったとかね。そういうのがいまコーチをやっている。日本でいうと陸上の織田さん、水連の高石さんとか……。

鷲尾　そうするとハンドボールというのは楽しみがあるわけだ。

北川　若いし、将来大いに有望だ。

塩川　もう一つ外国チームで感じたのは年長者のキャプテン格が、全選手をうまくまとめて引っぱって行く。とくにドイツなんかそうでした。例のブルマイスターは一人でそういうことをやるわけです。彼女の言うことはみんな聞くわけです。日本のようにコーチやマネージャーが気を使うことないんです。したがってコーチの数も少ない。マネージャーの補佐的なことはキャプテンがやっちゃうんです。だから向こうのマネジャーはヒマです。役員なんかヒマそうだった。そこへ行くと日本の役員は選手に振り回されてた。

理想はナショナルチームを

鷲尾　話を元に戻すが、さっき高嶋さんが毎年選手を送り出したいっていった。その場合チームを編成するためには、実業団チームからピックアップするのもいいけれど、事前にナショナルチームを作っておいた方がいい。遠征のときはそれを出すとか。僕はこの方法がいいと思う。

高嶋　それはいいです。理想だね。

鷲尾　理想だけど高嶋さんはどう思っているの。

高嶋　やって見たいと思っている。

西村　ぜひそうしてほしいです。

高嶋　もう一つはそうやって各実業団チームから二人なり三人なりを選抜してナショナルチームを編成する。そうして合宿してやって行く。それもいいが、それよりも実業団がうんと強くなって単独遠征する。このチームが帰国後ほかの実業団とやる。そうすればほかの残ったチームは外国に行ったと同じことですよ。そういう形を併用して行きたい。それをいまバレーボールの日紡貝塚がやってる。

ヨーロッパの人のことをケナすわけじゃないが、バレーボールはレベルが低い。スポーツ順位はハンドボールが上から二番か三番目にランクされている。

北川　二番目ですよ。バレーは下から二番目か、三番目にランクされている。

西村　日本と全く逆です。

宮原　バレーボールは六番目か七番目で下の方にランクされてる。スポーツ人口というと、サッカー、ハンドボール、卓球、陸上、ボクシング、それから六番目がバレーボール。八番目がバスケットですよ。だから日本のバレーボールとハンドボールを置き替えた状態です。

塩川　大会事務局なんか行って表を見ても、バレーボールというのは下から二番目ですよ。だからハンドボールの単一チームが欧州へ遠征して優秀な成績をあげることは大変なことです。

高嶋　日本のサッカーが世界選手権とることは絶対できないのと同じですよ。サッカーがオリンピックに勝つなんて夢だね。

西村　街かどのサッカーなんか見てもすごいですね。

ホテルを出発する日本チームと街の人々

日本のプロ野球と同じ

鷲尾　日本の野球クラスなんだな。

高嶋　日本のプロ野球がドイツのハンドボールと思えばいいのですよ。サッカーなんかすごいね。見渡す限りの農場の中にちゃんとポールが立っている。子供がはだしでボールを蹴ってる。

宮原　バスの中から見ると山の頂上に芝生がいっぱい。ボールがうまく転がらないんですよ。蹴ったらボールが転がるようなところにポールがポッと立ってる（笑い）。

北川　ウラソフのホテルの窓から下を見ていると煉瓦ベイの空地の焼け跡みたいなところはゴールポストがないでしょう。石を積んで一メートル間隔くらいで、四人でサッカーやってるんですよ。

高嶋　サッカーのポールのあるところ、かならずハンドボールをやっている。だから日本で考えるスポーツでは通用しない。ハンドボールの観衆というのは日本のプロ野球の観衆と同じだよ。

西村　日本もそういうふうになってほしいわ（笑い）。一日も早く。

高嶋　だから観衆のためにコートを作り、こんどの世界選手権のときも観衆のために陸上競技場をつぶしているんです。

塩川　競技場のコーナーの大切なところをつぶして、ハンドボールにあてているんです。スタンドは全部観衆に開放しています。

宮原　ルーマニアの共和国競技場では観衆二万人でした。それが全部キップ買って入ってるわけです。日本の金に換算すると千五百円です。そして一人残らずルールを知っている。

高嶋　ドイツもそうです。昨年行ったときも入場料十五マルクでした。十五マルクというと千五百円です。それが一万八千人入る体育館にはいれないで、二万人くらいいるわけだ。コートギリギリまで入れて二万人くらいいるわけだ。これは観衆のために外でやったわけだ。

西村　それはもうたいへんでした。ちょうど日本のプロ野球です。

北川　ハンドボールの選手が地方へ出たら日本のプロ野球の選手みたいな感じだ。

塩川　試合が終ってみんなで写真とったこと一回もないですね。

西村　とれないのです。きれいに並んだと思ったらワッーときてね。おマワリが全部スクラム組んでるけど全然そんなの問題にならない。だからわれわれは逆の方向へ逃げたんですよ。押しつぶされそうでね。

日本チームを歓迎する街のフアン

ルールを知っている観衆

北川 これはハンドボールを知ってるから、そういうゲームをした選手を見たいということで寄ってくるわけです。

塩川 観衆はルールをよく知っている。「なんだあの攻め方は……キーパーに真っすぐぶっつけちゃだめだ」とかいってね。たまたまレフェリーがミスジャッジをやる。観衆は怒って口笛を吹く。これはすごい。次の笛が聞えないですよ。

北川 ちょうど後楽園で騒いでるようなものだね。

宮原 早い話がストライク、ボール、いやセーフだ、アウトだというようなことで、観衆が飛び降り、あるいは観衆同士でケンカが始まるんです。

西村 観衆同士がケンカやってるんですからね。すごいですよ。プロ野球のそれと思っとけば間違いないでしょう。

鶯尾 しかし日本のハンドボールをここまで引き上げるというのはたいへんだな。

高嶋 いや大したことないと思っているね(笑い)。それは共同通信社の啓蒙いかんにかかってる。

北川 日本人の悪口言っちゃ悪いけど、日本ではハンドボールを知らな過ぎるんですよ。ハンドボールが世界にこういう位置にあるんだということをね。教科課定でもいろいろと問題が出てきますね。だからPRの立ち場にある人はそういうところを……。それもやはり見てきたものの一つです。

鶯尾 ドイツとかルーマニアの新聞のハンドボールの扱いはどう?

北川 大きいですね。日本に比べると全く。

鶯尾 僕のところに来た手紙の中に新聞の切り抜きがはいってた。みんなが並んでるところ。

塩川 あれが一番初め。

北川 あれはベルリンだね。

塩川 あのときケセラー氏が迎えにきてくれてね。

高嶋 第一ページですよ。新聞記者は日本と同じように特権階級なんだ。飛行場のタラップまで来て、下でみんなカメラ構えて待っている。日本では考えられないな。

北川 日本で飛行場に来てくれるのは共同通信くらいのものだ(笑い)。

スパイを出して研究

北川 ルーマニアは「日本のハンドボールがきた」というんでわざわざドイツまでスパイを出して研究してるんだ。

高嶋 ルーマニアのツドール氏は部下を飛行機で飛ばしてるんだ。

北川 それくらいの熱の入れ方ですね。

塩川 日本が8ミリや16ミリで写真とったり、記録とったりしてるでしょう。だから外国の役員は「日本チームは実に研究熱心である。日本は脅威だ」とびっくりしていた。

鶯尾 それで第一戦は26—3で負けたわけか。

北川 日本のすべてをよく知ってる。

西村 そうだったの。くやしいわ。

塩川 日本の弱点を突いてきた。

西村 かなり研究しているんですね。

塩川 日本のことを研究ずみだったわけですよ。

僕なんか全然向こうを知らないでしょう(笑い)。最初2、3点入れられたでしょう。選手はもうボーッとしちゃってね。

西村 日本は前半1点しかはいらない。ぼう然としてしまいました。

北川 初出場ですからね。しかし乗り込んだ以上しようがない。だんだんなおってきたですけどね。一番初めはこんなものでしょうね。文句は言えない。

日本で世界選手権を

鶯尾 それから最後に……。四年後の世界選手権はどこで開催するの。

高嶋 まだ決まっていないが、日本は1965年の男子に立候補した。デンマーク、スェーデン、フランスが同時に立候補してる。

鶯尾 男子選手権の場合、この前と同じ七人制で9チームですか。

高嶋 そうです。12チームで切らなくちゃいかんでしょうね。男子の場合12か9で切らなくちゃね。

鶯尾 3ブロックか4ブロックに分けて三チームずつね。

高嶋 3か4にね。

鶯尾 女子はまだわからないんだけどどこが立候補しそう?

北川 1966年プラハ(チェコ)が立候補している。

西村 また行きたいわ。こんどは上位入賞を……。まだ若いからいいでしょう。

塩川 その意気でがんばれよ。

西村 がんばります。

鶯尾 みなさん。どうもありがとう。

(了)

再考の要ある「ブロック」代表

~全日本選手権、最初の予選制~

今年から布かれた全日本の予選制。その最初の年だけに今年のエントリーを大いに注目したのだが、やはりいくつかの研究の余地が残されているようだ。

はっきりいって問題のなかったのは「前年度優秀チーム」の四つ(芝浦工大、大崎電気、桜丘会、全日体大)と「地元(開催地)」の二つだけ。

注目の「ブロック代表」は北海道と北陸が棄権、東海も一チームだけで、合計三つが不足。

「学生代表チーム」はワクは八つだが、参加したのは七つ。ここも一つが不足。

エントリーだけでは二十二チームと予定より四つ少い数となり、「その他優秀チーム」(協会推薦)というこの制度で、一番ワケのわからぬワクから三チームが登場してどうにか二十五となった。

多すぎるのではないかといわれた「学生代表チーム」が一つ不足なのは皮肉だ。これは、関学、明大、教大がそれぞれOBを加えるために権利放棄したもので、このワクは次回からはフル・エントリーとなろう。

問題なのは「ブロック代表」と「その他優秀チーム」だ。

「ブロック代表」はこの予選制の本旨であり、一番の重要点だ。聞くところによると初めてのせいか、ちゃんと予選をした地区は数えるほどだそうだ。そしてなお三チーム不足である。

関係者は次回からはフル・エントリーを信じて疑わないようだが、国体のシステムをそのまま用いたブロックの分け方が私にいわせれば拙い。

関東から東京を、近畿から大阪を独立させるべきではないか。また開催地の所属するブロックは定数プラス一にするとよいと思う。(今年の一例でいえば中国を二とする)過去十三回の参加チームの地域的傾向を考えれば、この措置の方が適当である。

東京・大阪の独立で増える数を入れても「ブロック代表」のワクが十五となるだけであり、その分を「その他優秀チーム」から減らせば最大数には影響がない。

「その他優秀チーム」と云うワクほど、いいかげんな印象を与えるものはない。それを最高六つまで認定するというのはいかなる根拠によるものか。そして何を「優秀」の判定基準にするのか。

大要に異論はないのだからその内容(数字)を再検討して、少しでも納得のいくものにしてほしい。

なお「ブロック代表」を送らなかった北海道、北陸、それに不足の東海の三ブロックには、協会として実情を聴取するぐらいの態度を示すべきだろう。(S)

今年は不作か？　高校球界

＝楽書帖＝　第11回

鷲尾武治

▽…世界選手権に参加した女子チームの帰国が12時間ばかりおくれた。7月28日の正午少し前に羽田に着き、午後2時すぎの全日空で小倉市に向かった。文字どおりの強行軍である。インターハイの開会式のあとに模範ゲームをご披露するため。私は仕事の合い間をみて伊丹空港に行ってみた。伊丹で乗り換えるという話をきいていたので……。伊丹着も予定より30分もおくれた。やっと着いた選手団を見ると元気なのは高嶋監督、北川ヘッドコーチら男の連中、レディーたちは疲れ切った表情で口が重い。比較的元気だったのは世界選手権で一番チビの宇井君、それに〝空の女王〟のアダ名をもらった西村君の二人。〝空の女王〟のいわれはちょっと言えないのが残念。どうしても知りたい方は直接お聞きください。伊丹空港にはわずか10分間休けいしただけで小倉へ飛んで行った。ご苦労さま。

▽…久しぶりにインターハイを見た。ことしの男子高校はどうも不作のようで、ずば抜けたチームがなかった。中京商が神代（東京）に敗れ、名門桜台がチャンピオンの座についた。個人的にみると神代の関根、桜台の近藤、小川ぐらいなもの。関東の各大学のスカウトがグラウンドで鉢合わせ。互いに『いいのが見つかったかい』とまぜ返す。女子の方はスカウトのベテラン（だと思う）の渡辺さん（大崎電気社長）が目を光らせている。『ことしは何人ぐらいスカウトするの』と水を向けたら『十五人ぐらい』。事情をきいたら東京に女子チームをもう一つ作るそうだ。それはジューキミシンのことで、十五人のうち八人はジューキに回すとか。一日も早く関東女子実業団リーグ戦をやるのが楽しみらしい。

▽…京都女高の植山絹子さんが準決勝の対秋田和洋戦で左足を骨折した。救急車で小倉市民病院に収容された。地元の小袋先生（福岡県協会理事長）の手回しがよく、10分後にフトンはもちろんなんでもそろい、味の素まで枕もとにあった。紙面をかりて小袋先生に感謝します。

▽…ことしのインターカレッジに関西学連加盟チームが不参加を決定した。理由は

1　大阪から仙台まで遠距離である
2　旅費がない
3　インカレに出場するには練習が不じゅうぶん

である。これはもっともらしい理由である。九州から熊本商大、中国地方から広島商大。山口大が参加しているから、遠距離は理由にならない。なにかしら不自然である。全日本学連は関西学連の申し入れを承知したというが、どうもすっきりしない。関西学連の加藤会長（関学教授）も「一チームも出ないのは不穏当だ」といっていた。

時評

気になる2事件の舞台裏

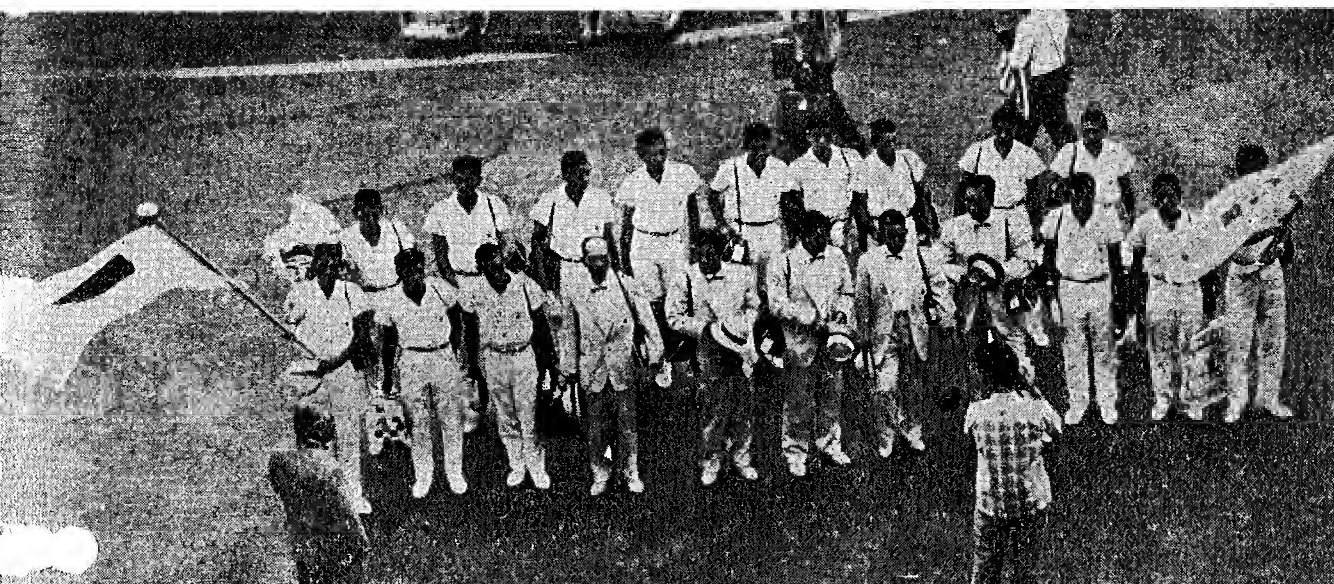
もっとスッキリ、スジを通そう

▽…ことしの全日本学生選手権（仙台）に関西学連から一チームも参加しない。新聞には「遠距離、旅費」の点で参加できないとあった。学生界の最高の大会に参加しないのは、どうも納得できない。大会は創始いらい第五回しかたっていない。「こんな歴史の浅い大会にはおかしくて参加できない」という気持がもしあるとすればそれは間違いである。学生王座、東西学生リーグ、東西対抗と数多い大会があり、どれひとつとってみても、学生にとっては大切なゲームである。リーグ戦や、王座決定が最高のゲームというなら、その考えはいますぐやめてもらいたい。全国の大学チームが一堂に会して、日ごろの〝わざ〟をきそうことこそ尊いのであり、学生最高のゲームなのである。リーグ戦、王座決定が大事なら、全日本学生も大事なはずである。聞くところによると桃山大学は参加することになっていたのを止めさせたとか。どうも真意がわからない。関西学連はどうかしている。学生で運営しているはずの学連に、だれかが悪知恵をつけさせたのではないだろうか。その点わたしにはくわしいことがわからない。早大もインカレに参加しない。早大、関学の名門チームがそろいもそろって不参加とは、舞台裏になにかがひそんでいるのではないか。だれかが関西学連を操っているのではないか。それにしても関西学連の学生諸君の無力さが悲しい。

▽…前号の投書欄で「遠征、残留組が仲よく」と大阪の一女子高校生が言っていたが、愛知紡では残留組が退社してしまった。悲しいことである。退社したのは早川、小島の両選手。これは世界選手権大会派遣選手をめぐってのことで、その中心人物は愛知紡、半田高を育て上げた林藤吉さんとか聞いている。まさか林さんともあろう人がそんなことはやるまいと思うが……。林さんが選手団のコーチに加えてもらえなかったこと、秘蔵っ子早川選手が参加できなかったことの二つがその理由という話。小倉のインターハイで同社の則武のぶ子さんに会ったとき、「チームの中はうまくいっているのか」ときいたら「おかげさまでチームの中はまとまっています。徳山の全日本総合を見てください」と言っていた。ところがあとから協会の人に聞いたら事実に反し、早川、小島両選手が退社したという。則武さんにしてみれば、チームのゴタゴタを人に知られたくなかったのだろうが……。林さんがもし腹いせのためにこんなことをしたとしたら、ずいぶん量見の狭い人だと思う。林さんに限ってそんなことはないと思いたい。早川のプレーは確かにうまい。高嶋全日本監督の話では、来年再びヨーロッパに遠征するという。その矢先だけに惜しい。短気は損気とはこのことをいうのだろう。

▽…この早川は愛知紡を円満退社したが、ハンドボールへの情熱を少しも失わず、八月下旬辞を低くして大崎電気の門をたたいた。大崎電気の渡辺さんは「愛知紡を円満退社し、しかもこれからもハンドボールをやるなら……」と心よく早川の入社を引き受けた。いちど死んだハズの早川が、短い期間で生れ変わった。実にラッキーな乙女である。心機一転、こんごの早川のプレーは大いに楽しみである。九月一日付けで入社し、連日猛練習をつづけている。

×　×　×



高校選抜チーム韓国に遠征

全日本高校選抜チームは8月29日から10日間、韓国に遠征し、ソウル（京城）で6試合を行なった。

日本チームの韓国訪問は、戦前の早慶連合チーム、昨年秋の日体大に次いで三度目であるが、高校チームの海外遠征は今回が初めて。同チームは5勝1引き分けの成績で9月8日帰国した。

全日本高校選抜チーム代表

団長　菅　是　敬
▽全国高等学校体育連盟ハンドボール部長▽明治37年2月18日生▽旧制東京高等工業学校卒。徳島県立工業学校教諭を経て現在都立世田谷工業高校長。

監督　徳　永　陸　繁
▽全国高等学校体育連盟ハンドボール副部長▽大正6年9月7日生▽日体大卒。都立重機工業学校（都立世田谷工業高校前身）教諭。

コーチ　稲　石　三　二
▽日本ハンドボール協会理事、愛知県ハンドボール協会理事▽昭和5年2月10日生▽日体大卒。名古屋市立桜台高校教諭。

マネージャー　清　水　正
▽全国高等学校体育連盟常務理事▽大正14年12月8日生▽山梨大研究科修了。山梨県立甲府第一高校教論を経て現在山梨県立園芸高校教諭。

役員　山　田　計
▽日本ハンドボール協会理事▽大正9年2月22日生▽日体大卒。大阪府立豊中高校を経て、現在大阪市立工芸高校教諭。

選手　尾　形　譲
▽東京都立神代高校3年▽昭和19年8月7日生

選手　牧　邦　弘
▽中京商業高校3年▽昭和19年8月4日生

選手　青　沼　正　義
▽北海道立室蘭商業高校3年▽昭和19年11月5日生

選手　大　槻　雅　夫
▽茨城県立石岡第一高校3年▽昭和19年5月3日生

選手　渡　辺　正
▽清水市立商業高校3年▽昭和19年12月6日生

選手　多　田　稔
▽兵庫県立兵庫工業高校3年▽昭和19年10月16日生

選手　余　吾　東　洋　民
▽愛媛県新居浜工業高校3年▽昭和19年7月12日生

選手　村　田　久
▽山口県宇部工業高校3年▽昭和19年10月5日生

選手　八　重　柏　和　重
▽宮城県古川工業高校3年▽昭和19年12月20日生

選手　坂　口　学
▽群馬県立桐生高校3年▽昭和19年1月8日生

選手　氷　見　脩
▽富山県立小杉高校3年▽昭和19年2月24日生

選手　小　川　安　人
▽名古屋市立桜台高校3年▽昭和19年5月18日生

選手　木　野　実
▽大阪府立寝屋川高校2年▽昭和20年12月5日生

選手　飯　端　寿　昭
▽大阪府立三国丘高校3年▽昭和20年3月26日生

選手　矢　島　芳　弘
▽福岡県立小倉工業高校3年▽昭和19年7月31日生

▽8月31日　日本　22—9　東星高校
▽9月1日　日本　16—7　麻浦高校
▽2日　日本　16—6　養正高校
▽4日　日本　18—7　大倫高校
▽5日　日本　14—7　普成高校
▽6日　日本　7—7　五山高校
（引き分け）

大崎電気（男子）が初優勝

女子は愛知紡が6連勝

第十四回全日本総合選手権大会は8月19日から5日間、山口県徳山（女）、下松（男）両市で行なわれた。男子は準々決勝で優勝候補の芝浦工大が没収試合を食い、このため対抗馬の大崎電気（東京）が決勝で全日体大を17―11で破って初優勝した。大崎は三年連続して決勝に進出しながら、昨年、一昨年と芝浦工大に敗れた。女子は愛知紡が六連勝した。世界選手権出場の沢田、塚原、青木、山崎、篠崎の5人が出場（磯部は帰国と同時に退部）し、洗練されたプレーを見せた。二回戦で寝屋川クラブに9―7と苦戦した。

男子

▽一回戦

神戸大 18（11―6、7―5）11 日新製鋼呉（広島）
桃山学院大 21（12―4、9―7）11 岐阜ク
中大 11（6―3、5―5）8 全明大
全関学 23（15―6、8―6）12 東北学院大
同志社大 20（5―6、9―8、3―3、3―2）19 全岡山ク
全教大 23（12―5、11―7）12 福岡北部ク
京都ク 20（10―7、10―8）15 山口ク
法大 23（13―6、10―8）14 高津ク（大阪）
立教大 20（8―6、12―6）12 徳山高

▽二回戦

全日体大 27（16―2、11―8）10 神戸大
桃山学院大 18（9―9、9―8）17 明星ク（東京）
中大 13（6―5、7―7）12 住友化学菊本（愛媛）
芝浦工大 22（11―7、11―6）13 立大
大崎電気 18（8―2、10―6）8 全関学

▽準々決勝

広島商大 18（10―10、8―5）15 京都ク
全教大 13（6―6、7―5）11 同大
桜丘会 18（9―7、9―9）16 法大
全日体大 24（14―6、10―6）12 桃山学院大
中大（没収試合）芝浦工大
大崎電気 25（12―4、13―8）12 広島商大
桜丘会 17（9―5、8―9）14 全教大

▽準決勝

全日体大 13（4―0、9―2）2 中大
大崎電気 10（6―6、4―3）9 桜丘会

▽決勝

大崎電気 17（10―8、7―3）11 全日体大

反	得	S	〔全日体大〕		〔大崎電気〕	S	得	反
0	0	0	島崎	GK	福本	0	0	0
6	0	0	久保田	FB	高森	0	0	5
1	0	0	北岡	FB	高橋	0	0	4
9	0	0	蓮井	HB	村上	1	1	4
5	0	0	田上	HB	田口	1	0	10
1	0	0	東	HB	高井	0	0	8
3	2	7	小林	FW	金田	2	0	5
5	3	9	北山	FW	小谷内	3	2	0
2	1	6	井上	FW	宮原藤	3	1	1
0	2	5	栗山	FW	井上	11	6	4
2	3	10	青木	FW	竹野	13	7	3
3	0	1	（河上）		（坂野）	0	0	0
37	11	38		計		34	17	44
	5			14メートルスロー			2	

▽評　大崎は一度も全日体大にリードを許さず快勝した。前半13分4―4と同点に追いつかれたが、竹野に打たせて全日体大を押えた。後半よく走って全日体大のバックスをゆさぶった。後半5分田口の退場でちょっと苦しかったが、バックスが全日体大FWを押えてしまった。個人プレーで光ったのは竹野（大崎）、河上（全日体大）の二人。決勝としては凡戦だった。

女子

▽一回戦

熊本市高　不戦勝　尼崎高ク
豊陵ク（大阪）10（8―3、2―6）9 中京大
秋田和洋女高 13（9―5、4―6）11 梅花ク（大阪）
寝屋川ク 15（7―2、8―2）4 岡山ク

▽二回戦

大崎電気 17（8―2、9―0）2 豊陵ク
レナウン東京 8（3―2、5―1）3 徳山高（山口）
日体大 12（9―2、3―1）3 厚狭高（山口）
大洋デパート 16（6―2、10―4）6 秋田和洋女高
徳山ク（山口）11（4―3、7―7）10 熊本市高
田村紡（三重）9（3―2、6―4）6 レナウン大阪
菊池農蚕高（熊本）18（9―3、9―2）5 日女体短大
愛知紡 9（3―3、6―4）7 寝屋川ク

▽準々決勝

大崎電気 10（5―4、5―3）7 レナウン東京
大洋デパート 15（6―3、9―5）8 日体大
田村紡 18（12―10、6―6）16 徳山ク
愛知紡 12（4―3、8―4）7 菊池農蚕高

▽準決勝

大洋デパート 10（4―3、6―2）5 大崎電気
愛知紡 19（6―6、13―4）10 田村紡

▽決勝

愛知紡 6（4―2、2―2）4 大洋デパート

〔大洋〕	S	得	反		〔愛知〕	S	得	反
木原	0	0	0	GK	篠崎	0	0	0
立山	3	1	9		山崎	0	0	2
徳永	6	1	1		宮本	3	2	6
山口	2	0	4		塚原	8	2	2
千原	1	0	3		山田	4	0	2
西村	5	0	2		青木	4	1	2
久連松	9	2	1		沢田	4	1	2
	26	4	20	計		23	6	16
		3		7メートルスロー			2	

▽評　前半は互いに相手の動きを見たためスローペースとなった。ときおりポストプレー、カットインを見せたが得点に結びつかなかった。前半2分大洋は徳永のシュートで先行したが、愛知は9分塚原、12分、30分宮本、15分沢田、17分青木が得点して4―2とリードした。大洋は後半2分30秒久連松のシュートで4―3と1点差につめたが、前日までの元気がなく逆転するに至らなかった。

第13回全国高校選手権大会

桜台高（愛知）が五年ぶりに優勝

女子は静岡城北が初優勝

高松宮賜杯第13回全国高校ハンドボール選手権大会は7月29日から8月2日まで小倉市三萩野総合グラウンドで行なわれた。男子は2連勝をねらう中京商（愛知）が準決勝で神代（東京）に敗れる番狂わせがあった。決勝は名門桜台（愛知）と神代（東京）との間で争われ、桜台は前半の失点をばん回して神代を押え、三十二年（第八回大会）いらい五年ぶりに七度目の優勝をとげた。東京のチームが決勝に勝ち進んだのはこれが初めて。女子は予想どおり静岡城北—菊池農蚕の決勝となり、静岡城北が初優勝した。（評は共同通信社　鴛尾武治記者）（注＝スコアは右側が前半、左側が後半）

男子

▽一回戦

浦和市立 17（8 9／7 3）10 金沢商

土浦工 11（9 2／2 1）3 古川工

神代 17（10 7／4 0）4 福井商

塩山 15（7 8／10 4）14 高松一

宇部工 13（5 8／2 4）6 室蘭商

加納（岐阜）8（0 1 2 5／1 0 4 3）8 福島　抽選勝ち

氷見 10（4 6／4 4）8 洛星

博多工 22（10 12／1 6）7 柏崎（新潟）

修道 14（8 6／3 2）5 彦根東

▽二回戦

中京商 12（6 6／4 4）8 浦和市立

鎌倉学園 10（5 5／2 6）8 熊本市商

大石田（山形）15（10 5／4 3）7 弘岡農（高知）

土浦工 13（8 5／6 3）9 兵庫

神代 17（11 6／6 7）13 足利工

小倉工 13（9 4／6 6）12 塩山

屋代東（長野）12（7 5／2 8）10 四日市工

清水東 9（2 0 3 4／1 1 5 2）9 宇部工　抽選勝ち

盛岡一 12（10 2／2 3）5 加納

寝屋川 21（11 10／1 0）1 鶴崎工（大分）

天城 15（6 9／7 5）12 桐生工

新居浜工 15（8 7／6 0）6 氷見

博多工 10（5 5／3 6）9 大曲農（秋田）

添上（奈良）11（6 5／3 3）6 加治木工（鹿児島）

和歌山商 11（3 8／3 3）6 青森商

桜台 10（5 5／3 6）9 修道

▽三回戦

中京商 10（4 6／4 3）7 鎌倉学園

大石田 8（6 2／2 4）6 土浦工

神代 12（8 4／4 3）7 小倉工

清水東 9（4 5／3 3）6 屋代東

寝屋川 12（6 6／5 6）11 盛岡一

新居浜工 7（1 0 1 5／0 1 3 3）7 天城　抽選勝ち

博多工 11（5 6／3 4）7 添上

桜台 10（7 3／5 2）7 和歌山商

▽準々決勝

中京商 7（3 4／0 2）2 大石田

前半大石田の善戦で中京商は苦戦した。山形県チームがベスト8に残ったのは初めて。りっぱである。

神代 11（6 5／5 5）10 清水東

好ゲームとなり、神代は1点差で逃げ込んだ。甲乙つけがたいチーム。

寝屋川 13（4 2 2 5／1 1 5 2）9 新居浜工

新居浜工は終始寝屋川を苦しめたのはりっぱ。惜しいところで延長になったが、捨て難いチーム。

桜台 20（11 9／4 5）9 博多工

桜台はやっと本領を発揮した。博多工は地元の応援で大いに善戦したが、名門の前に惜しくも敗れた。博多工は感じのいいチーム。

▽準決勝

神代 11（7 4／3 2）5 中京商

反	得	S	〔神代〕		〔中京〕	S	得	反
0	0	0	尾形	GK	牧	0	0	0
2	0	0	茂呂	FB	柳沢	0	0	4
11	0	0	駒井	FB	近藤	0	0	2
3	0	0	楊原	HB	蟹江	0	0	1
3	0	0	橋本	HB	安藤	0	0	3
4	0	0	平田	HB	片山	0	0	0
1	0	0	大宅	FW	山田	6	3	3
5	2	9	百武	FW	大島	2	0	0
0	0	0	浜元	FW	小島	1	0	2
4	9	12	関根	FW	西尾	3	0	3
4	0	0	青木	FW	竹本	5	1	2
					（大下）	1	1	0
37	11	21	3	14メートルスロー	3	18	5	20

桜台 13（4 9／4 4）8 寝屋川

反	得	S	〔桜台〕	〔寝屋川〕	S	得	反
0	0	0	山村	秦	0	0	0
3	0	0	小林（克）	鈴木	0	0	12
5	0	0	林	柴田	0	0	1
1	0	0	鳥居	多賀谷	0	0	5
7	0	0	河村	北村	0	0	6
1	0	0	小林直紀	中井	0	0	1
1	4	5	近藤	新堂	1	0	0
3	6	8	小川	木村	13	5	0
2	2	4	山田	木元	1	1	1
0	1	3	竹内	重村	1	0	4
1	0	2	小林直樹	大西	9	2	1
1	0	1	（加古）				
24	13	23	2　14メートルスロー	3	25	8	31

▽決勝

桜台（愛知） 14（4—7, 10—3）10 神代（東京）

反	得	S	〔桜台〕		〔神代〕	S	得	反
0	0	0	山村	GK	尾形	0	0	0
1	0	0	小林(克)	FB	茂呂	0	0	6
6	0	0	林	FB	駒井	0	0	6
5	0	0	鳥居	HB	平田	0	0	3
5	0	0	河村	HB	橋本	0	0	5
3	0	0	小林直紀	HB	楊原	1	1	4
1	8	12	近藤	FW	大宅	2	0	0
1	3	7	小川	FW	百武	8	1	2
0	0	0	(加古)	FW	関根	8	6	3
0	1	3	山田	FW	浜元	3	1	2
2	1	7	竹内	FW	青木	2	1	2
2	1	2	小林直樹	FW				
26	14	31	1	14メートルスロー	2	24	10	33



5年ぶりに優勝をとげた桜台チーム

（評） 桜台のスローオフで始まり、そのまま持ち込んで15秒に近藤がシュートして先取点をあげた。1分またも近藤がコントロールのいいシュートで2—0とした。あざやかな速攻である。神代は1分30秒、5分に関根のシュートで2—2と追いついた。近藤—関根の打ち合いとなった。7分楊原が左サイドからロングを決めて神代が初めてリード。9分桜台も近藤が3点目を決めて3—3。神代は正確にパスを送り、激しいローリングで桜台のバックスをゆさぶった。グラウンドが泥んこだから、ドリブルをやめてパス戦法に出た神代の作戦はよかった。逆に桜台FWは攻撃範囲が狭く苦戦した。中央ばかり攻めて両サイドを使わず、神代バックスに簡単につぶされていた。8分30秒から16分50秒まで桜台はノーポイント。この間に神代は15分関根、16分楊原からのパスをうけた浜元がゲットして5—3とリード、20分には百武、24分には関根が14メートル・スローを決めて前半優位に立った。神代がこれほどやるとは予想しなかったが、準決勝で中京商を破って自信をつけたのだろう。前半7点のうち関根は一人で4点をあげる大活躍、桜台の近藤も前半3点をあげており、後半の打ち合いに興味がつながれた。

後半は1分まず桜台が神代ゴール前のルーズプレーから青木が右スミに決めて徐々にピッチをあげた。神代は前半にみせたパスワークが乱れ、個人プレーに走りすぎてチャスをのがした。そこを桜台バックスが厚いデフェンスで押えた。桜台は4分、6分に近藤がシュートして追いあげ、8分には小川が左スミにゴールして8—8とタイにした。このあたりから桜台のペースとなり、速攻の連続で12分竹内、13分近藤、15分には竹内—近藤—小川とボールが渡って得点し、11—8と3点をリードした。神代も5分関根、17分関根の14メートルスローで11—9としたが、ほとんどチャンスなく、むりなシュートで自滅の形。桜台はますます調子の波にのり、20分、22分、23分と矢つぎ早やの速攻で一気に神代を押し切った。桜台の小川は前半不調だったが、後半はすばらしかった。エース近藤の好リードがよく、桜台優勝のヒーローであった。神代は予想以上に善戦し、名門桜台を苦戦に追いやったのは、今大会の大きな収穫であった。スタミナの不足が優勝をのがしたといっていい。それにしてもCF関根のプレーは桜台の近藤とともに賞賛に値いする。

▽稲石桜台監督の話 前半3点リードされたが、この程度なら逆転できると思っていた。近藤は腰が完全に直っていなかったが、わたしが思っていた以上に活躍してくれた。バックスもよくやってくれた。久しぶりの優勝、なんともいえないほどうれしい。

▽佐野神代監督の話 前半ドリブルをやめてパス戦法に出たのがよかった。後半FWに疲れが出て、個人プレーになってしまった。スタミナの不足ですよ。しかしみんなよくやってくれた。欲をいえばキリがないが、優勝したかった。準決勝で中京商を破ったのが、なによりもの収穫です。関根のプレーはすばらしかった。来年は優勝してみせます。

女子

▽一回戦

涌谷 13（5—6, 8—5）11 平塚江南

和田和洋 15（7—1, 8—4）5 有磯

那賀（和歌山） 9（3—3, 5—5, 1—1, 0—0）9 津女（三重）　抽選勝ち

静岡城北 16（5—0, 11—1）1 菊華（東京）

中津北（大分） 9（7—3, 2—3）6 彦根西

▽二回戦

半田 17（11—4, 6—2）6 涌谷

巻（新潟） 5（2—2, 3—2）4 高岡（高知）

高志（福井） 10（3—2, 7—2）4 小高農工（福島）

菊池農蚕（熊本） 17（8—0, 9—0）0 添上（奈良）

秋田和洋 18（7—6, 11—2）8 高崎市女

県立尼崎 12（5—0, 7—2）2 筑紫中央（福岡）

大垣南 12（7—1, 5—3）4 小諸商（長野）

京都女 10（2—2, 8—1）3 那賀

静岡城北 12（5—4, 7—1）5 栃木女

明善（福岡） 8（3—3, 5—0）3 室蘭清水ケ丘

井原（岡山） 8（4—4, 4—3）7 熊谷商工

花巻南（岩手） 5（2—2, 3—1）3 羽咋（石川）

寝屋川 10（5—2, 5—2）4 徳山

稲沢（愛知） 8（3—0, 5—2）2 山陽女（広島）

山梨 6（2—1, 4—2）3 新居浜東

水海道二 15（7—0, 8—0）0 中津北

▽三回戦

半田 7（5—0, 2—0）0 巻

菊池農蚕 7（5—1, 2—2）3 高志

秋田和洋 3（1—2, 2—1, 0—0, 0—0）3 県立尼崎　抽選勝ち

京都女 8（6—2, 2—4）6 大垣南

静岡城北 7（6—3, 1—2）5 明善

井原 12（5—1, 7—1）2 花巻南

稲沢 7（3—3, 3—3, 1—0, 0—0）6 寝屋川　延長

▽稲沢の速攻、寝屋川の遅攻と対照的なチーム。稲沢の復活は注目の的であり、名門寝屋川とのゲームは興味があった。稲沢は延長前半2分で幸運な7メートルスローを決めて勝った。延長後半のタイムアップ寸前に寝屋川は7メートルスローを失敗した。速攻チームの勝利。

水海道二 7（2－1, 5－0）1 山梨

▽準決勝

菊池農蚕 7（2－2, 5－1）3 半田

菊池の速攻はいい。高山、中村(千)の好プレーで勝った。半田は昨年よりスケールが小さくなり、後半バックスがもろかった。

秋田和洋 8（4－2, 4－3）5 京都女

実力は互角。京都は後半植山（一年）が左足骨折で退場し、バックスがくずれた。これさえなければ得点はもっと接近していた。秋田はよく走った。

静岡城北 8（4－1, 4－1）2 井原

井原は力いっぱい戦ったが、静岡のデフェンスは堅かった。まず順当。

稲沢 8（4－1, 4－2）3 水海道二

稲沢の速攻に水海道は全く圧倒された。水海道はバックスが弱い。

▽準決勝

菊池農蚕 9（2－3, 7－3）6 秋田和洋

〔菊池〕	S	得	反	〔秋田〕	S	得	反
GK山口	0	0	0	GK永沢	0	0	0
高山	7	3	2	畠山	0	0	3
八並	1	1	3	伊藤(陸)	0	0	3
中村(千)	4	4	2	阿部	2	0	1
西口	2	0	3	新山	2	2	3
中村(美)	1	1	3	斉藤	12	4	3
中屋	4	0	5	山口	9	0	1
	19	9	18		25	6	14

0　7メートルスロー　1

静岡城北 8（3－1, 2－4, 0－0, 3－2）7 稲沢

〔稲沢〕	S	得	反	〔静岡〕	S	得	反
GK木村	0	0	0	GK川崎	0	0	0
内藤	7	0	4	鈴木	13	7	5
笹野	2	0	2	纐纈	2	0	4
林	2	1	3	林	1	0	3
竹市	2	1	5	加藤	0	0	1
川口	5	0	4	伏見	1	0	2
永井	7	5	0	亀山	2	1	3
				(山本)	1	0	1
	25	7	18		20	8	19

2　7メートルスロー　0

▽女子決勝

静岡城北（静岡）9（5－2, 4－5）7 菊地農蚕（熊本）

▽評　試合前に菊池農蚕のベンチは「静岡の鈴木を徹底的にマークせよ」と作戦を練った。だがフタ

〔菊池〕	S	得	反	〔静岡〕	S	得	反
GK山口	0	0	0	GK川崎	0	0	0
高山	11	3	3	鈴木	17	6	3
八並	0	0	1	纐纈	3	1	5
中村(千)	5	3	8	林	3	1	2
西口	3	0	6	加藤	0	0	14
中村(美)	1	1	8	山本	3	0	0
中尾	4	0	3	亀山	4	1	4
(田代)	0	0	0	(伏見)	0	0	0
(赤松)	0	0	0	(山口)	0	0	0
(佐藤)	0	0	0	(横山)	0	0	0
(岡崎)	0	0	0	(奥山)	0	0	0
	24	7	29		30	9	28

2　7メートルスロー　0

初優勝の静岡城北チーム

光る桜台の技量、城北の闘志

小袋是郎（大会副委員長）

総評

今年は大分県、新潟県の男女チームが初参加するなど年を追って盛大になってきた。本大会は猛暑、強風、大雨と悪条件にもかかわらず、高校生らしく元気いっぱい戦った。

男子

桜台（愛知）対神代（東京）の決戦となり、神代は前半善戦したが桜台は後半、見事な逆転勝ちをやってのけた。

桜台優勝の最大因はすべて猛練習にある。前半リードされながらも、後半風上の利を得て全員が勝てるという自信に溢れ、のびのびとプレーをしたことである。後半8分8－8の同点にするや、14分まで得点を許さなかったたくみな守備。攻めては11－8と一気にリードを奪うあたりのゲーム運びのうまさ。他チームではとうていまねのできぬ立派なものである。チームワークのよさでもある。

神代はダークホースぶりを発揮した。準決勝、決勝では背番号を変えるなど、実によく戦ったが、初優勝を意識しすぎてかえって敗戦を招いたのではあるまいか。又ポイントゲッターがマークされてから攻撃が非常に弱くなったのも敗因の一つであろう。

寝屋川高は実によく精練されたチーム。攻撃があまりにも一つの型にはまりすぎて変化にとぼしい。防御力が強力で基礎技術をマスターした相手には通用しない。今後変化ある攻撃力の今一歩の鋭さを加えることが必要ではあるまいか。昨年優勝の中京商が神代に敗れたが、これはいかに防御力がよくても、攻撃力がないと勝てぬという勝負の鉄則を怠った感があった。その他好ゲームは寝屋川－新居浜工、神代－清水東戦。印象に残

るチームは二回戦で桜台に最後まで食い下がった修道であった。

女子

名門静岡城北対新進菊池農蚕の決戦となった。城北は素晴しい闘志で菊池を圧倒し、守っては菊池農蚕の得意とするダブルポストプレイのフェイントパスをよくカットしていた。攻めては目のさめるような速攻、カットインなど近来まれにみるチームプレーを発揮した。菊池農蚕は少しラフプレイが目立った。後半一気に追い込んだあたりはいかにも新進らしい迫力で、好感のもてるチームである。両チームとも技術的、作戦的には大差はない。やはりビッグゲームともなると、闘志と出場経験の差がはっきりした一戦といえる。

稲沢高も実によくがんばった。来年を期待したいチームである。秋田和洋女は開会式五日前に現地に着き、コンディションの調整に努力した。その精進は立派であった。女子チームとしてはめずらしく大型で前評判のよかった寝屋川は、チーム全体からうける印象は往年の鋭さがない。体力的に欠点があり期待はずれに終わった。

前年の勝者半田が準々決勝で菊地に7—3で敗れたことは意外であった。

印象に残るゲームは稲沢—寝屋川、静岡城北—稲沢戦である。名門明善が二年生を主体としたチームながら静岡城北に健闘したことは立派であった。

技術面

今大会男女を通じ技術面で感じたことは、パスミスが非常に多いこと。パスのコースも単調であり、基本的なことであるが今後パスの種類、パスのコースに変化をもたせること。特に攻撃時においてトップスピードにそのキャッチが未熟である。強力なシュートはスピード（プラス）ウエイトのよくのることである。またシュートチャンスの感が非常に悪かった。男子では一人のエースに頼るチームが多かった。このために他の選手はやたらにシュートチャンスをつぶしていた。やはり全員が強力なシューターでなくてはならない。エース依存のためか14メートル（7メートル）スローの技術が非常にまずい。14メートル（7メートル）スローの成切、不成功で勝負が左右されたと思われるゲームが多かった。

シュート技術は強力に優るものはないが、GKのタイミングをはずすことも一つの方法である。機に応じた強弱のシュート方法など、今後マスターしてもらいたい。

とくに14メートル（7メートル）スローにおいては剣法の奥義である先先の先を勉強することが必要である。

防御面においてはルール改正、審判申し合わせ事項統一のためか昨年よりも粗雑なプレーは少くなった。全般的に防御体制において重心を低くすることと、腰を曲げることを混同している選手が多かった。防御のフットワークにしても、ステップではなくすり足で防ぐ方法がよい。

今年は男女ともにGKの技術が非常によかった。

全般的にチーム力においては男子上下の格差が段々縮少し、女子においては格差が大きくなって来た感じであった。

（福岡県ハンドボール協会理事長）

をあけると、この鈴木にかき回されてしまった。菊池は初めての決勝進出、それに優勝を意識しすぎて堅くなりすぎていたことは見のがせない。のびのびとプレーできないところを、うまく静岡につかれてしまった。試合は静岡のスローオフで開始。菊池は2—4ゾーンで固めた。2分静岡は左サイドにボールが回り、鈴木のシュートで先取点をあげた。あざやかな速攻である。静岡は3—3ゾーンで菊池のFWを押えたが、7分中村のタテの切り込みを許し、ミドルシュートされて1—1。8分静岡はローリングから鈴木がミドルシュートし、9分には林が左サイドから決めて2—1とリードした。菊池もチャンスがあったが、静岡の厚いデフェンスを破れなかった。12分高山が7メートルスローを決めて1点差。12分静岡は纐纈が右サイドからプッシュシュートを決め、13分には鈴木が左から攻めて得点して5—2。これで前半を終わった。後半2分静岡は鈴木がノー・マーク・シュート、菊池も4分7メートルスローを失敗したが、5分フリースローから中村(千)が一気に決めた。後半の菊池はよく攻めた。中央がだめなら両サイドを使い、ローリングをみせて静岡のデフェンスを前に呼びこんだ。7分高山、11分中村(千)、12分にはカットしノーマークで高山といちじは8—6と2点差まで追いつめた。静岡も12分鈴木のミドルが決まって9—6、菊池はこのリードにもひるまず16分中村(千)が左サイドから持ち込んで9—7。残り4分、菊池は心死になって反撃したが、静岡はがっちり固めて菊池をみごと押えた。菊池は静岡の鈴木に6点を許したのが大きな敗因。この試合で気がついたことは、静岡のチャージが多かった。後半両チームともあせり気味で凡プレーが目立ち、オーバーステップも多かった。もう少し落ちついてプレーしてほしかった。

▽**望月静岡城北監督の話** みんなよく走ったことが勝因です。これ以外に勝因は見当たりません。

▽**荒木菊池農蚕監督の話** 鈴木をマークするよう言ったのですが、これが徹底しなかった。これが敗因であり、文字どおりの完敗です。いまのチームは三年計画の三年目に当たり、ここまで進出できたのはなによりです。あとは国体（岡山）優勝をねらいます。

芝浦工大5連勝

日体大は惜しくも2位

第5回全日本学生選手権大会

第5回高松宮杯全日本学生ハンドボール選手権大会は7月22日から5日間、仙台市宮城県営サッカー場で行なわれた。三位決定では中央大が後半よく劣勢をバン回し一松井の活躍もあって三位を獲得した。決勝は予想どおり芝浦工大と日体大の間で争われ、前半のリードをよく守った芝工大が優勝した。これで芝工大は第1回大会から連続5連勝。なお二位は日体大、三位中大、四位立教大。試合終了後高松宮杯は芝工大北村主将に授与され、5日間にわたった熱戦に幕をおろした。

▽一回戦（スコアは右側が前半、左側が後半）

教　大 29（16－4，13－10）14 東北大

教大がダブルスコアで勝ったが、東北大の山村は一人で9点をあげる活躍をみせた。

▽二回戦

岐阜大 24（12－9，12－6）15 山口大

岐大の吉川、岩田、山口大の津田、松原の好シュートが目立った。

立教大 27（10－7，17－4）11 山形大

山形大の小川は6点をあげて大活躍したが、実力の差で敗れた。

中京大 21（11－5，10－7）12 広島商大

広島は昨年よりFWがよくなったが、中京大にくらべ少し見劣りがした。

芝浦工大 23（13－6，10－2）8 教　大

教大増田のプレーはよかった。芝浦はあいかわらず強い。

日体大 38（19－0，19－2）2 福島大

実力の差。福島のFWはよく走ったが、日体大バックスを破れなかった。

法　大 34（15－5，19－3）8 熊本商大

法大は強い。熊本商はあとひと息。

慶　大 21（6－1，3－2，9－5，3－7）15 東北学院大

東北学院の善戦はりっぱ。

中　大 不戦勝 岩手大

▽準々決勝

立教大 13（7－5，6－6）11 中京大

カット写真は日体大対福島大戦。日体大栗山のシュート。背番号③は福大古川

反	得	S	〔中　京〕		〔立　大〕	S	得	反
0	0	0	柴田	GK	草谷	0	0	0
7	0	0	吉田	FB	斎藤	0	0	6
6	1	1	森川	FB	兼松	0	0	1
6	0	1	葛島	HB	西村	0	0	3
5	0	0	都築	HB	与淵	0	0	11
2	0	0	高橋	HB	松本	0	0	5
2	5	9	杉本	FW	小野精	16	6	1
2	0	0	馬場	FW	田村	1	0	0
1	1	5	羽上田	FW	中根	6	1	2
0	0	1	長谷川	FW	高久保	0	0	3
4	4	12	伊藤	FW	江台	9	3	2
0	0	0	（荒井）		（島崎）	4	3	0
					（小野悦）	0	0	0
35	11	29				36	13	34

日体大 15（6－5，9－7）12 法　大

反	得	S	〔法　大〕		〔日　体〕	S	得	反
0	0	0	上久保	GK	島崎	0	0	0
5	0	1	押田	FB	蓮井	0	0	14
12	0	0	宮本	FB	北岡	0	0	4
1	0	0	松村	HB	石原	0	0	3
6	0	0	斎藤	HB	田上	0	0	8
10	0	0	箕輪	HB	三友	2	0	6
1	2	9	尾崎	FW	小林	12	5	5
0	7	17	吉村	FW	北山	9	6	2
0	0	4	田口	FW	河上	5	1	1
0	3	10	西村	FW	栗山	3	1	0
0	0	5	関口	FW	沢田	1	1	0
					（林）	1	1	1
35	12	46				33	15	44

中　大 14（7－10，7－2）12 慶　大

反	得	S	〔中　大〕		〔慶　大〕	S	得	反
0	0	0	三浦	GK	高田	0	0	0
12	1	2	坂井	FB	古川	1	0	3
2	0	0	佐藤	FB	曾田	1	0	4
6	1	2	樋口	HB	渡辺	0	0	4
8	0	0	川口	HB	橋本	0	0	3
7	0	1	峠野	HB	石原	0	0	7
0	4	8	椿	FW	白壁	3	1	5
1	1	5	新島	FW	諏訪	11	4	3
1	5	10	大脇	FW	松尾	4	2	0
1	1	5	松井	FW	堤	8	2	3
2	1	6	有留	FW	阿部	13	3	2
0	0	2	（佐久間）					
40	14	41				41	12	34

芝浦工大 28（12－6，16－4）10 岐阜大

反	得	S	〔芝浦〕		〔岐大〕	S	得	反
0	0	0	谷	GK	滝	0	0	0
7	0	0	川島	FB	高島	0	0	2
9	0	0	久保		座馬	1	0	0
9	1	2	中	HB	犬飼	0	0	2
4	1	2	斎藤		渡辺	0	0	1
0	0	0	野村		鈴木	0	0	0
0	4	9	福島	FW	田中	4	1	1
2	9	10	金山		岩田	4	1	1
2	3	6	北村		岩間	4	1	1
1	3	8	森谷		吉川	16	5	2
0	7	11	越智		加藤	5	1	0
0	0	1	（山田）		（吉田）	1	1	0
342849						351010		

▽準決勝

芝浦工大 19（10―4、9―6）10 立教大

反	得	S	〔芝浦〕		〔立大〕	S	得	反
0	0	0	谷	GK	草谷	0	0	0
8	0	0	久保	FB	斎藤	0	0	0
3	0	0	川島		兼松	0	0	3
7	0	0	中	HB	西村	0	0	1
4	0	0	斎藤		与縄	1	0	8
1	0	0	野村		松本	0	0	1
1	2	5	福島	FW	小野精	17	4	1
4	5	10	金山		島崎	4	2	3
0	7	9	北村		中根	5	0	0
2	3	6	森谷		高久保	1	0	0
1	2	8	越智		江名	9	4	0
					（田村）	2	0	0
311938			1	14メートル	1	391017		

▽…関東学生一部リーグで延長の熱戦を展開した両チームだけに、好試合が期待されたが、立大のポイントゲッターLW小野が芝工大バックスのマークにあって前半無得点だったことが大きくひびき芝浦に完敗した。前半は芝工大のFWが好調に走り、15分までに6―0と差をつけた。立大は17分LI島崎21分RW江名が得点したが、芝工大もCF金山らが攻撃の手をゆるめず6点差のまま前半を終了した。

後半開始直後立大の小野がロングを決め、CF中根の好リードもあって反撃した。しかし芝工大も金山、北村、森谷のセンタースリーがよく動いて、立大バックスをゆさぶり、確実にゴールをきめて再び点差をひろげ楽勝した。

日体大 10（4―5、6―2）7 中大

反	得	S	〔日体〕		〔中大〕	S	得	反
0	0	0	島崎	GK	三浦	0	0	0
3	0	0	蓮井	FB	坂井	0	0	8
5	0	0	北岡		佐藤	0	0	5
3	0	1	石原	HB	樋口	0	0	2
7	0	0	田上		川口	0	0	5
2	0	0	三友		峠野	0	0	6
0	5	12	小林	FW	松井	3	1	1
2	1	10	北山		新島	6	2	0
3	3	3	河上		大脇	10	2	5
0	0	5	栗山		有留	1	0	1
0	0	1	林		椿	6	2	0
0	1	4	（沢田）		佐久間	1	0	1
251036			2	14メートルスロー	1	27734		

▽…中大の善戦で好試合を展開した。日体大は、このところ関東学生リーグで中大を苦手としているだけに、最初から堅くなっていた。それに反して中大は前半2分LW松井がカットインから右サイドを抜きクリーンシュートを決めて先手をとり、遅攻でゆっくりボールを回して、日体大バックの焦りをさそう作戦に出た。これが成功して前半15分までに4点を連取した。しかし日体大も少ないチャンスを有効に生かし18分北山が14メートルスローから初の得点をあげ、河上のするどい突っ込みもあって前半は1点差にこぎつけた。

後半しばらく両チームとも決め手がなかったが5分に日体大のCF河上がドリブルから倒れ込みシュートを右下にきめて同点に追いついた。こうなると日体大は強い。LW小林が勝ち越し点をあげてから一度は同点にせまられたが、また河上、小林がよく決めてみごとに逆点勝ちした。

▽三位決定戦

中大 14（9―10、5―3）13 立教大

▽…立大は前半5分まで江名、中根、小野がたて続けにゴールを決めて出足好調に中大を圧した。しかし中大はFWの攻撃に参加したFB坂井が8分ゴールを奪って2点差に迫り、なおもLWに回った大脇がボールをよくつなぎ、自らも好シュートを放ち、15分から23分のあいだに4ゴールを決めて同点に追いついた。立大も27分LI高久がゲット、再度1差点をつけ前半を終了した。後半開始直後中大はまた大脇がたくみなカットインから得点、同点とした。

後半の立教は10分RI江名がゲット、中大RI新島が同点のゴールを決めたが、江名、小野のシュートよくゴールイン2点差をつけた。その後両チームとも攻めあぐみ、このまま立大が勝ちをにぎるかと思われたが中大佐久間が右コーナーぎりぎりから立大GK草谷の頭ごしに山なりのシュートを決め、また24分にもLI松井がアンダーハンドのバウンドシュートを決め同点とした。こうなると中大は追うものの利、26分には中大との試合はじめての勝ち越し点を松井が決めるとともに、三位を獲得した。

反	得	S	〔中大〕		〔立大〕	S	得	反
0	0	0	三浦	GK	草谷	0	0	0
5	1	2	坂井	FB	斎藤	0	0	1
4	0	0	佐藤（仁）		兼松	0	0	6
8	0	0	佐藤（英）	HB	西村	0	0	3
6	0	0	川口		与縄	1	0	13
6	1	1	峠野		松本	0	0	1
0	0	4	梅木	FW	島崎	7	2	0
1	2	5	新島		江名	8	5	1
2	2	4	有留		中根	5	1	2
3	3	5	松井		高久保	1	1	0
1	4	10	大脇		小野精	13	4	3
2	1	6	（佐久間）		（田村）	1	0	0
381337			0	14メートルスロー	0	361330		

大阪で第六回全日本学生

▽…全日本学生連盟は、明年の第六回全日本学生選手権大会を六月下旬、または七月上旬に大阪で開くことに決めた。

第五回全日本学生選手権の女子部門は、エントリーが中京大（東海）一チームだけのため取り止めとなった。

▽決勝

芝浦工大 12（7―4、5―7）11 日体大

反	得	S	〔芝浦〕		〔日体〕	S	得	反
0	0	0	谷	GK	島崎	0	0	0
9	0	0	川島	FB	蓮井	1	0	5
6	0	0	久保		北岡	1	0	4
5	0	0	中	HB	石原	0	0	3
10	0	0	斎藤		田上	0	0	2
4	1	1	野村		三友	1	1	3
1	1	2	福島	FW	小林	7	1	5
5	5	9	金山		北山	10	6	1
3	4	10	北村		河上	4	2	1
4	0	3	森谷		栗山	8	1	1
0	1	8	越智		沢田	4	0	0
					（林）	0	0	1
471233			0	14メートルスロー	2	361125		

▽…両者今年になって三度目の対戦。芝浦は春のリーグ戦3―7、7―8と連敗している。芝浦にと

っては「全日本学生」のタイトルを賭けたというより、日体大から1勝をあげることの方が〝重要〟であったろう。

その闘志は開始直後RI金山のクリーンシュートを生んだ。さらにCF北村の連続ゲットで優位に立ち、その後もHB野村、金山らの得点で一方的な試合となった。しかし、日体大も19分RI北山の14メートルスローと河上の奮闘で3点差に追いあげ、勝負の興味を後半に持ち込んだ。

後半開始後すぐ芝浦は連続3ゲットで10—4とし、芝浦の楽勝を思わせた。このあとどうしたことか芝浦の得点がとまってしまった。このあたり豪放さはあるが、単調に流れすぎるという芝浦FWの弱点を現わした。これが日体大の反撃をさそう結果となった。

日体大は5分から15分までの10分間に4点を連取し、8—10と再び試合は白熱した。

芝浦は16分ようやく金山が11点目を記録したが、日体大も河上、北山とあざやかなシュートを放ち10—11と1点差とした。そして残り時間3分。河上がまたノーマークのチャンスをつかんだが失敗。ついに芝浦の前に屈した。しかし日体大の驚異的な粘りで、エキサイトした。いかにも学生日本一を争うにふさわしい好試合だった。

なおこれで芝浦工大は第一回大会いらい5年連続優勝をとげた。

全般にレベル向上
実力伯仲の芝浦、日体大

あとがき 昨年までは芝浦の優勝が大会前から確実視され、大会の興味を薄らさせていた。今年は春の関東リーグで日体大が優勝、また他の関東一部各校の実力も接近。さらに東海地区の中京大、東北の東北学院大など地方勢が実力向上したこともあって、この大会の優勝争いの行くえは混とんとしていた。

準決勝に勝ち進んだ4チームの芝浦、立大、日体大、中大はいずれも関東一部の上位校。準々決勝で敗れた中京大、法大は、ともに立大、日体大に再度優位に立ちながらチームプレーの差で涙をのんだ。

準決勝で日体大は、中大がリードして試合をもつれさせた。CF河上の活躍があって後半12分やっと勝ち越し点をあげ、中大を振り切った。

これに対して芝浦は立大の無気力に助けられ、前半6点、後半3点の差をつけて楽勝した。

結局この準決勝の試合内容が決勝戦を左右したといえる。

しかも日体大は対法大でRW小林が腰を痛め、得意のミドルシュートがほとんど射てなかった。これに対し芝浦は全員が試合ごとに調子をあげていた。

芝浦の勝因はFB久保を中心としたバックスのたくみなデフェンス、北村を主力にした金山、越智、森田らのFWがやはり強力だったことが大きい。その豪放な攻撃スケールは、敗れた日体大が小柄な河上、栗山を軸に、好機によく変化のあるシュートを放って活躍したのとは対照的であった。



準決勝芝工大—立大、北村のジャプシュート

しかし、芝浦、日体の実力はまさに紙一重、秋にはさらに激戦となろう。

このほか個々のプレーヤーでは、中大のGK三浦がしばしばピンチを救う好守を見せた。中京大のFW伊藤のミドルシュートの威力も印象的であった。また立大の小野、中根のコンビも定評通りの好技を示していた。

準々決勝までに姿を消したチームの中でも慶大の諏訪、東北大の山村、東北学院大の高橋(長)、広島商大の市原、法大の吉村などすぐれたFWがいた。チームの総合戦力という点で未だしの感だった。

大会内容は全般のレベル向上で、近来になく充実した選手権大会だった。

年次決勝記録

▽第一回　芝浦　18—12　日体
▽第二回　芝浦　18—11　明大
▽第三回　芝浦　13—9　明大
▽第四回　芝浦　12—10　中大
▽第五回　芝浦　12—11　日体

▽第12回全日本学生選抜東西対抗は9月15日午後4時から名古屋市鶴舞グラウンドで行なわれ、東軍が勝った。対戦成績は6勝6敗となった。

東軍　22（11—7、11—4）11　西軍

第10回早大対慶大定期戦は9月8日午後4時から東京の小石川サッカー場で行なわれた。早大は前半のリードをまもり、21—17で慶大を破った。対戦成績は5勝5敗。

早大　21（10—9、11—8）17　慶大

▼過去の成績

(第1回)　早大　8—5　慶大
(第2回)　慶大　13—12　早大
(第3回)　慶大　12—6　早大
(第4回)　慶大　13—11　早大
(第5回)　慶大　10—7　早大
(第7回)　早大　15—10　慶大
(第8回)　早大　16—10　慶大

連載第二回

ハンドボール球史

昭和12年にも全日本選手権

NHKの杉山茂記者から次のことを申し入れてきましたので掲載します。(鷲尾)

前号から連載の「記録を中心とした日本ハンドボール球史」は球界にとってありがたい企画である。

この企画は本誌の一つの使命でもあり、充実を願ってやまない。前号に若干の疑義があるので今回はその点についてふれよう。(NHK杉山茂)

前回の戦前の全日本編で疑問を持つのは、昭和十五年開催の第十一回明治神宮体育大会ハンドボール競技(別掲)を加えていないことである。

この大会のハンドボール競技は、神宮大会で初の独立種目として取り扱われた史上記念すべき大会である。一般男子のほか中学男子と一般女子の二部門が加えられている。

一般女子の第一回全国大会という点でも特筆されるべきである。前回の本誌ではこの昭和十五年の大会に一言も触れていないのは、特別な理由があるのだろうか。

『読売スポーツ一九五五年版』および『スポーツ八十年史』のうち『日本ハンドボール協会史』の項(380頁)のそれぞれ『年次全日本選手権記録』には、この大会が第三回全日本選手権として取り扱われている。

むしろ昭和十四年の紅白試合を除いても、昭和十五年の大会を生かすべきである。

これまでの「年次記録」では

▽第一回　昭和12年(前号掲載)
▽第二回　昭和13年(同右)
▽第三回　昭和15年(別掲)
▽第四回　昭和17年(前号掲載)

としているのが普通のようである。私もこれが妥当と思う。

前号のように昭和14年10月31日の第十回明治神宮体育大会における「全日本紅白試合」を第三回全日本選手権として取り扱うならば、以下昭和15年は第四回、昭和17年は第五回となろう。

この四回説か五回説かの認定は協会がなすべきであり、当稿では参考意見を述べるにとどめたい。

なお、昭和十五年は六月に日独交歓ゲームが東京、奈良で日体対在日ドイツ人選抜軍との間に二試合行なわれている。昭和十五年のこうした活潑さに比べて昭和十六年は、全日本選手権大会も開かれず、神宮体育大会でもハンドボール競技は行なわれていない。ハンドボール界でこの年行なわれた主要大会は、春、秋の関東学生リーグ戦、第五回関東選手権、それに第四回東西対抗の四つにすぎなかった。

なお、高嶋洌氏(協会理事長)の著書「ハンドボール入門」19頁には、昭和十四年にも全日本選手権大会が開かれたようになっているが、これは著者の感違いではなかろうか。

▽第三回全日本選手権(兼第十一回明治神宮体育大会＝昭和15年10月27日～29日、明治神宮外苑競技場及び日体グランド)

(男一回戦)
静専クラブ(静岡) 7（5－3 2－1）4 早大(東京)

(二回戦)
日体(東京) 9（7－0 2－0）0 静専ク(静岡)
神戸(兵庫) 4（2－0 2－1）1 茨城師範OBク
大阪ク 7（3－1 4－0）1 文理大(東京)
慶大(東京) 7（5－2 2－3）5 日体OB(東京)

(準決勝)
日体 13（7－0 6－1）1 神戸ク

	【日体】	【神戸】
FW	四宮	室井
FW	山田計	岸本
FW	徳永	近藤
FW	棉本	足立
FW	高島	山田
HB	山田文	中谷
HB	広井	浜崎
HB	川村	太田
FB	花畑	熊野
FB	島田	溝本
GK	宮本	中丸
FT	3	3
13mT	0	0

慶大 5（4－1 1－0）1 大阪ク

	【慶大】	【大阪】
FW	林(大)	大崎
FW	古田	門山
FW	西	川島
FW	林(吉)	平
FW	内藤	板東
HB	井上	中島
HB	大坪	前田
HB	島田	軒原
FB	有元	白井
FB	須藤	佐藤
GK	和田	村上
FT	11	6
13mT	0	0

(決勝)
日体 13（5－2 8－3）5 慶大

	【日体】	【慶大】
FW	四宮	林(大)
FW	山田計	和田
FW	徳永	西
FW	棉本	林(吉)
FW	高島	内藤
HB	山田文	井上
HB	広井	大坪
HB	川村	島田
FB	花畑	有元
FB	島田	須藤
GK	宮本	中村
FT	18	17
13mT	1	0

(女子一回戦)
倉敷高女(岡山) 不戦勝 茨城女子師範

(準決勝)
梅花高女(大阪) 1（0－0 1－0）0 静岡高女(静岡)
倉敷高女(岡山) 4（2－1 2－1）2 日体女子(東京)

(決勝戦)
倉敷高女 3（1－2 1－0 延長 0－0 1－0）2 梅花高女

	【梅花】	【倉敷】
FW	植山	横溝
FW	古田	片山
FW	山村	山本
FW	加藤	西山
FW	中村	川上
HB	熊沢	三宅
HB	高木	菅沼
HB	奥野	岡村
FB	草刈	松田
FB	内田	三好
GK	平山	太田
FT	10	8
13mT	1	0

▽参考　中学男子成績

(一回戦)
天王寺中(大阪) 7（4－0 3－1）1 浦和商(埼玉)

(準決勝)
青山師範(東京) 4（2－0 2－2）2 天王寺中(大阪)
東邦商(愛知) 3（1－0 2－1）1 新京商(関東州)

(決勝)
青山師範 5（3－0 2－3）3 東邦商

(編集者から) 広瀬謙三氏(現野球博物館)の資料によると、一回戦天王寺中7－1浦和商のほかに「青山師範9－0関西中(岡山)、東邦商3－2静岡師範」の二試合があります。また同氏は第三回全日本選手権(昭15)を第十一回明治神宮体育大会(昭15)としておりります。いずれ明治神宮大会の項で再録したいと思っています。

秋季戦線展望

早慶定期戦（9月8日）を皮切りに、秋の学生シーズンが幕をあけた。

今秋は11月に韓国大学チームの訪日、新春にはユニバァーシァードへの遠征が計画されている。例年になく花やかな話題ににぎわっている。

駒沢球治郎

日体大に連勝の希望

関東

日体は今春常勝芝浦工大の手から10シーズンぶりに王座を奪還したが夏の全日本学生決勝では芝浦に12―11で敗れた。しかしその攻守はやはり優勝候補の最右翼で、久々に春秋連勝の色が濃い。

今年の日体大の強味は攻めてよし、守ってよしのまとまりにある。春の総得点109、総失点76の数字が、攻守の安定さを物語っている。伝統的な試合運びのうまさは、現在のように上、下位校の差がちぢまっているときには大きな戦力である。

FWの栗山、小林、北山、河上、バックスの蓮井、田上、GK島崎らは大きくくずれるということがない。他のチームにとっては日体大を倒すには骨が折れよう。

調子に乗るか芝浦工大

芝浦工大は全日本学生選手権でようやくスケールの大きい攻守を見せた。春はリーグ10連勝を目前にして日体大に一敗地にまみれた。秋への闘志は異常なほどで、その試合ぶりは大いに注目される。ただ北村を筆頭に金山、青木、越智らのFWの精力的な動きはさすが大型チームらしい。春は勝った試合の中にも、力で押し切ったような星が多かった。力に頼りすぎるようだと、再び苦戦の多いシーズンとなろう。調子の波に乗れば、その攻撃力は抜群だけに、首位の座に戻るのは容易だ。バックスもなかなかいい。HB野村の存在は大きい。

この両校を追うのは中大、立大、法大である。中大は春、日体大にただ一つの黒星をあたえ、全日本学生では第三位となった。CF大脇に頼りすぎ、大脇自身も一人で試合をしているようではあまりいただけない。全日本学生でそうした欠点が見えなくなったのはよかった。有留、松井らの激しい動きはスピードもあり、今シーズンは大きな期待をかけてよさそうだ。

立大はFW小野、中根をはじめ若手が成長し、春は芝浦と延長の熱戦を演じた。久々にこのチームに〝力〟を感じたし、ダークホースとしておもしろい存在だ。

法大は今年いちばん成長の目立ったチーム。エース吉村を筆頭に西村、田口らの活躍で、昭和二十八年秋いらい久しぶりに三位の座を得た。気力も充実しており、優勝戦線の〝目〟として注目される。

早慶明の奮起を期待

春は早慶明の名門三校がいずれも下位に並んだのはあまりにも寂しかった。早大、明大は卒業生の痛手が埋まらず、慶大はもう一歩の力足らずで1勝しただけ。

各校とも優秀な先輩が多く指導者にも恵れているのだが、現役選手に気力があまりない。

わが国のハンドボールとともに歩んで来た名門三校の復調をのぞみたい。二部では教大が春に引き続き強そうで、以下東京学芸大、防大、茨城大といったところ。加盟一年を経た日大も順調な成長を見せており、千葉工大とともに注目したい。順天堂大、東大、武蔵工大が春の低調からどの程度脱しているか。

女子は相変らず日体大と日女体短大の二校だが、春にストレートで負けた日女体短大の進境を期待しておきたい。

関学追う同大、桃山学院

関西

本命は関学、対抗は同大、ダークホース桃山学院大というのが前評判である。関学は昨年春、秋と優勝を失ったが、今春ようやく優勝して名門健在を示した。

伝統的に春より秋に強いといわれているから連勝も可能だ。

FWはベテラン藤井を除いては森末、宮本、大西、十倉、吉田と比較的若いメンバーで編成している。いずれも得意の緩急攻法を体得してソツがない。バックスはLH村田以下LB大河内、RB中倉、それに新人のCH籔田が好守備を見せている。GK石田も新人ばなれした球さばきで、若い選手が多い割にまとまっている。

ただ春は同大に敗れ、桃山学院大に1点差で辛勝するなど、かつての関学のように独走はのぞめない。各チームも「打倒関学」をめざしている。

その一番手と目されるのは同大である。昨秋全日本学生王座に出場してから、チーム全体に見違えるようなたくましさが見られる。今春西日本学生で関学に延長のすえ敗れたがリーグ戦では10―7で勝った。

鳥井、大曾根、宮野を中心としたFW、それにRB東尾、CH矢柴らの巧技で堅い守備を見せるバックス。試合運びの点では関西随一である。前半戦で取りこぼしさえなければ、優勝の可能性はじゅうぶんある。シーズンごとに力を加え、春には遂に二位となった新鋭桃山学院大の活躍は、今シーズン最大の焦点といえる。岩津、北垣、五味らのFWはあざやかなパス・アンド・ラッシュをみせ、バックスもよくまとまっている。今秋もその試

合ぶりは期待していい。有力な優勝候補といっていいだろう。

関学にしても、同大にしてもいやなチームである。

この三校に次ぐのは関大、神大、京大である。関大はFWの池上、寺田、バックスの岩村、中野など好選手が多い。春は負け越した。試合の出来にムラが多すぎる。

春の神大は荘林、高井、西本の攻撃力、GK黒杭、バックスの川崎、片山と、ほとんどメンバーが動かなかったにもかかわらず期待を裏切った。チーム力に進歩が少なかったからだ。

京大は浅野というずば抜けたポイントゲッターを軸にしてまとまっている。西村、大西も確実な攻撃を見せるのでFW力はA級である。この三校はもう一つ試合ぶりに安定度がない。いずれも力のある選手をそろえているだけに優勝戦線に加わる力を持っている。そうなればリーグ戦はおもしろくなる。

Aクラス進出をねらう甲南大は前半戦の相手としてうるさい存在。調子の波にのるとこわい。

一部に返り咲いた立命大は、ひところの低迷からようやく脱したようだ。LI中村を中心にどこまでやるか。気力次第である。二部ではCF瀬恒を持つ大阪府大の首位は動くまい。これを追って大経大、大阪歯大が上位グループというところ。阪大、大阪学芸大、大阪市大、大阪工大は決定的な力に欠ける。

闘志示す中京大

東海ほか

東海はいぜん中京大の独走になろう。全日本学生では近藤の負傷から誤算を招いた。その実力は全国でも有数で羽上田、伊藤、森川、都築ら攻守の中心の動きはすばらしい。東日本大会で宿願の打倒関東を果し、自信を持っている。岐阜大の進境も注目される。春は中京大と接戦を演じ、その後も意欲的な練習を積んでいるのであなどれない。岩間、吉川、岩田のFW陣がよい。その他では名大、愛知学芸大、名工大。名大には朱宮、学芸大には後閑、名工大には桜木などの好選手がいる。東海リーグはシーズンごとにその実力が上がっている。

西部（中国、四国、九州）は昨秋、今春の両大会に優勝した広島商大がいい。山口大、熊本商大などに代ってすっかりこの地区のナンバーワンになった。エース市原を主力に内田、安達らの攻撃はなかなか鋭い。全日本学生、全日本総合などのビッグゲームを経験してどの程度の成長を示すか。

山口大は松原、津田などFWに好選手がいる。広島商大とはちょっと開きができてしまったようだ。熊本商大は選手全体が若いだけに、来シーズンあたりにむしろ期待がかけられよう。

その他では春の西部大会準優勝の西南大、それに広島大、岡山大など。

東北・北海道では全日本学生で慶大に一歩もゆずらなかった東北学院大、それに東北大がいい。東北学院大は高橋(長)、村上、東北大は山村とすぐれたFWを持っている。東日本大会出場を賭けての両者の対戦は白熱した好勝負となろう。その他山形大、福島大、岩手大、北大などがある。仙台での全日本学生開催で、その影響が秋の大会に現われるよう望んでやまない。

韓国チームが来征

各学連（リーグ）の秋への布陣は大体以上のようなものである。このほか秋には、全日本学連が主催する「全日本学生選抜東西対抗」、「全日本学生王座」と二つのビッグゲームがある。また今秋は「日韓親善学生」というスペシャルエベントが開かれる予定。

第十二回を迎える「全日本学生選抜東西対抗」は西軍6勝5敗のリードを受けて、九月十六日名古屋の舞鶴グランドで行なわれる。東西対抗となるとどうも西軍のまとまりが東軍をしのぐようだ。今年も西軍がわずかに優勢とみたい。いずれにせよ、選手諸君が、選ばれたことだけで満足すべきでない。内容的にもオール・スター・ゲームらしい"見せ場"と、"コク"のある試合を望みたいものだ。

初の「日韓親善学生」は、試合内容よりも、大いに親善の実をあげてほしい。加盟各校あげて協力態勢をとるよう望んでおきたい。技術的には昨秋韓国に遠征した日体大の6戦6勝、総得点120、総失点45から推して、日本側の完勝に終ろう。

十一月に行なわれる「第六回全日本学生王座」は日体大―関学、日体大―同大、芝浦工大―関学、芝浦工大―同大あたりのカードと見るのが常識だ。

☆☆☆ 実業団よもやま話 ☆☆☆

○…全日本の女王として常勝の名をほしいままにした愛知紡の主力選手が相次いで退社又は退部した。

一説には欧州遠征にもれた残留組の不満が発端ともいわれる。この名門がちょう落するのだとしたらそれはあまりにも惜しい。

○…日産自動車(熊本)、宗形製作所(大阪)、日立製作所(茨城)、丸万百貨店（東京）など、男子チーム結成の名乗りをあげているのはうれしいニュースだ。これらのチームの多くが"七人制"専門というのも、最近の大きな傾向である。

七人ならチームを作りやすいこと。これが"七人制の魅力"であり、大きな原因である。

○…東海地区では全国にさきがけて、地域実業団選手大会"東海実業団選手権"を計画中。

愛知、岐阜、三重にはそれぞれ男女チームが軌道にのった活躍ぶりを見せており、実現の可能性はじゅうぶん。

○…新三菱重工名古屋(愛知)と丸紅飯田(大阪)が中心で、「大阪、名古屋実業団対抗」が計画されている。

実業団各チームの原稿を歓迎します。内容は試合成績、活動状況など。

大阪教員クが初優勝

第5回全日本教職員選手権

二位 全茨城

第五回全日本教職員選手権大会（室内）は、8月11、12の二日間、横浜市の文化体育館で十一チームが参加して行なわれた。

大会は参加チームを四つに分け各勝者による決勝トーナメントを行なった結果、大阪教員クラブが初優勝した。

▽予選（Aブロック）

神奈川教員ク　16（7－7、9－3）10　三重教員団
神戸ストーク　25（9－4、16－4）8　神奈川教員ク
神戸ストーク　28（13－4、15－2）6　三重教員団

（Bブロック）

全茨城教員団　11（6－3、5－6）9　静岡教職員ク
静岡教職員ク　21（9－8、12－8）16　興東ク（奈良）
全茨城教員団　19（9－8、10－6）14　興東ク（奈良）

（Cブロック）

長野教員ク　18（6－3、12－9）12　栃木教員団
高陵ク（高知）　17（10－8、7－8）16　栃木教員団
長野教員ク　22（10－2、12－8）10　高陵ク（高知）

（Dブロック＝二チーム）

大阪教員ク　27（10－5、17－8）13　全愛知教員団

▽決勝トーナメント

（準決勝）

全茨城教員団　18（12－9、6－7）16　長野教員ク
大阪教員ク　32（13－8、19－11）19　神戸ストーク

（三位決定戦）

長野教員ク　24（16－6、8－11）17　神戸ストーク

（決勝）

大阪教員ク　39（18－7、21－6）13　全茨城教員団

【茨城】	得点
GK 藤田	0
黒沢	1
山内	5
住尾	1
柏崎	0
河岸	3
折原	3
鈴木	0
乙羽	0
菅又	0
佐賀	0
	13

【大阪】	得点
GK 光崎	0
望月	0
山本	0
藤井	4
青木	15
東	5
井上	11
高山	3
村田	1
丸岡	0
	39

年次優勝チーム

▽第一回　茨城教員クラブ
▽第二回　東京教員団
▽第三回　神戸ストーク
▽第四回　中止
▽第五回　大阪教員クラブ

関東勢が勝つ

好例の東西大学定期戦

初の六大学集結

好例の東西大学定期戦は今年も伝統の早大―関学戦を始め各試合が東西で行なわれた。

関学、早大を破る

▽第17回早大―関学定期戦は、6月10日東京小石川球技場で行なわれた。前半優位の関学が、早大の反撃を封じ三年ぶりに勝った。関学の11勝6敗。

関　学　20（10－8、10－9）17　早　大

▽OB戦

関学OB　18－6　早大OB

※

▽第15回京大―慶大定期戦は6月10日京大グラウンドで行なわれ、引分けとなった。慶大の10勝3敗2引き分け

慶　大　16（7－10、9－6）16　京　大

▽OB戦

慶大OB　15－9　京大OB

※

▽第8回阪大―名大定期戦は6月9日阪大グラウンドで行なわれ、名大が圧勝した。名大の6勝2敗。

名　大　10（6－1、4－0）1　阪　大

※

▽第9回甲南大―慶大定期戦は6月11日大阪うつぼ公園グラウンドで行なわれ、慶大が9連勝した。

慶　大　12（7－2、5－1）3　甲南大

▽新人戦

慶　大　8－2　甲南大

※

▽第1回東西六大学対抗ハンドボール大会と名打った第15回立命大―明大、第12回立大―同志社大、第9回中大―大阪歯大の三試合は6月26日、東京小石川球技場で行なわれ、明大、立大、中大の関東勢が勝った。

▽第9回中大―大阪歯大

中　大　30（10－4、20－4）8　大阪歯大

中大の8勝1敗

▽第15回明大―立命館大

明　大　17（7－2、10－7）9　立命館大

明大の13勝2敗

▽第12回立大―同志社大

立　大　11（6－6、5－3）9　同志社大

同大の7勝5敗

京大、神大破り優勝

第六回国立大学選手権

▽第6回国立大学選手権大会は今年から新たに九州大が加わり、八大学となって7月29日から三日間神大六甲台グラウンドで行なわれた。

決勝リーグで無敗同士の京大、神大の関西一部両校が優勝を争い京大が延長で神大を破り四度目の優勝を飾った。

▽Aゾーン

名大　10－8　九大
神大　22－0　北大
名大　13－11　北大
神大　10－1　九大
神大　12－7　名大
九大　12－5　北大

▽Bゾーン

阪大　11－10　東大
京大　11－9　東北大
東大　11－7　東北大
京大　15－7　阪大
京大　10－9　東大
東北大　14－6　阪大

▽下位決定戦

東北大　17－6　北大
阪大　8－3　九大
阪北大　10－8　北大
東北大　18－5　九大

▽決勝リーグ

京大　14－7　名大
神大　9－4　東大
東大　13－6　名大

京　大　19（10－8、4－6、2－2、3－2）18　神　大

【最終順位】①京大②神大③東大④名大⑤東北大⑥阪大⑦九大⑧北大

東海国立は岐阜大

▽第11回東海国立大学総合体育大会ハンドボール競技（7月15、16日、愛知学芸大学）

▽五、六位決定戦

三重大　12－7　静岡大

▽三位決定戦

愛知学芸大　15－11　名工大

▽決勝戦

岐阜大　19－12　名大

地方だより

朝霞部隊が初優勝

▽**第1回自衛隊東部方面（関東）大会**（7月1日、埼玉県朝霞自衛隊グランド）

（一回戦）

32普通科連隊（東京） 11（5－3 6－1）4 久里浜生徒隊（神奈川）

施設学校（茨城） 11（6－5 3－4 1－0 1－0）9 富士学校（静岡）

（準決勝）

32普通科連隊（東京） 17（10－5 7－3）8 通信学校（神奈川）

朝霞部隊（埼玉） 9（5－3 4－0）3 施設学校（茨城）

（三位決定戦）

施設学校（茨城） 10（5－3 5－2）5 通信学校（神奈川）

（決勝）

朝霞部隊（埼玉） 10（6－2 4－2）4 32普通科連隊（東京）

（評） スコアは開いたが、決勝戦らしくきびきびしたプレーを見せた。小雨の中のゲームだったが、第一回大会としてはりっぱといっていい。朝霞の勝利は若さによるもの。この大会には6チームが参加したが、こんごさらにふえるだろう。大いに期待している。このゲームのレフェリーは岡村昭二氏（教育大OB）でした。

▽**第12回西部日本学生選手権大会**（6月9、10日、山口大学グランド）

（一回戦）

広島商大 19（10－3 9－2）5 九州大

広島大 10（2－2 8－4）6 鹿児島大

西南学院 14（9－8 5－4）12 山口大

岡山大 4（2－1 2－2）3 熊本商大

（準決勝）

広島商大 28（11－4 17－5）9 広島大

西南学院 15（9－0 6－4）4 岡山大

（三位決定戦）

広島大 13（5－7 8－5）12 岡山大

（決勝）

広島商大 32（18－11 14－9）20 西南学院

「レフェリー」藤田信義氏

	〔広島〕	〔西南〕
GK	松尾	山下
FB	柏原	立石
	佐伯	今泉
HB	西元	大神
	村瀬	井上
	和田	本田
FW	東	安達
	上田	疋田
	内田	森方
	市原	伊藤
	田中	吉本
シュート	46	39
反則	27	25
14メートルスロー	2	2

▽**第1回宗形製作所対丸紅飯田七人制定期戦**（7月1日、寝屋川高校）

宗形製作（大阪） 14（6－2 8－10）12 丸紅飯田（大阪）

両チームとも本誌の「話題のチーム」で紹介ずみ。宗形製作はことし芝浦工大OBの川辺、氷見高OBの飛田（GK）、栗沢（FW）が入社した。丸紅飯田は慶大OBの松本、井狩、東大OBの矢島などがいる。

▽関西学生春季リーグ一、二部入れ替え戦（6月10日、大阪学芸大池田分校）

立命大（二部） 7（4－3 3－3）6 大阪府大（一部）

神戸市が優勝

▽**第13回五大都市**（横浜、名古屋、京都、大阪、神戸）体育大会は7月14、15日名古屋市で行なわれた。ハンドボール（七人制）はことし初めてオープン種目として参加、神戸市が優勝した。なお明年の第14回大会（京都市）から正式種目となるよう、関係者の間で検討している。

▽一回戦

横浜市 12（6－4 6－3）7 京都市

▽準決勝

神戸市 19（10－8 6－8 2－1 1－2 抽選）19 名古屋市

横浜市 17（10－1 7－4）5 大阪市

▽決勝

神戸市 8（3－3 5－1）4 横浜市

▽コンソレーションマッチ

名古屋市 12（6－8 6－4）12 京都市　引き分け

中京大が三連勝

▽第三回愛知学生リーグは6月2、13、17の三日間、名古屋市名工大グランドに四校が参加して行なわれ、中京大が全勝優勝、三連勝した。

名大 14－7 愛知学芸大

中京大 18－5 名工大

中京大 20－7 愛知学芸大

名大 9－6 名工大

中京大 24－1 名大

名工大 17－6 愛知学芸大

【順位】 ①中京大3勝②名大2勝1敗③名工大1勝2敗④愛知学芸大3敗

金沢商と富山女高

▽**第9回北陸三県総合体育大会**ハンドボール競技は6月17日富山県小杉高グラウンドで行なわれた。高校男子は金沢商（石川）、高校女子は県立富山女子高が優勝した。

▽男子

金沢商（石川） 13（2－2 11－3）5 小杉高（富山）

金沢商 15（6－6 9－3）9 福井商（福井）

小杉高 14（8－4 6－5）9 福井商

（順位） ①金沢商2勝②小杉高1勝1敗③福井商2敗

▽女子

県富山女（富山） 22（10－1 12－3）4 羽咋高（石川）

県富山女 7（3－1 4－2）3 高志高（福井）

高志高 8（4－1 4－5）6 羽咋高

（順位） ①県立富山女高2勝②高志高1勝1敗③羽咋高2敗

関東は浦和と栃木

▽第八回関東高校選手権は7月22日から4日間、東京の世田谷工高、神代高両グラウンドで、男子32校、女子30校が参加して行なわれた。

男子は浦和市立高（埼玉）が初優勝、女子は栃木女高が二年ぶり三度目の優勝をとげた。

▽男子準々決勝

慶応 13－9 東京二商

浦和市立 20－11 東京一商

明星 10－6 早大学院

鎌倉学園 16－14 桐生工

▽同準決勝

浦和市立 15－7 慶応

鎌倉学園 14－13 明星

▽同決勝

浦和市立（埼玉） 14（8－6 6－7）13 鎌倉学園（神奈川）

▽女子準々決勝

水海道二 12－3 神代

太田二 11－6 甲府二

桜水商 16－3 菊華

栃木女 9－3 笠間

▽同準決勝

水海道二 8－7 太田二

栃木女 15－5 桜水商

▽同決勝

栃木女（栃木） 8（4－3 4－4）7 水海道二（茨城）

投書欄

全日本学生選手権に関西学連が参加しなかった問題について投書が12通もありました。

全日本学生に一大汚点

関西の各大学不参加の報を知ったとき、私はまさかその理由が「遠距離」、「経済面」「練習不足」といった単純な理由にあるとは思わなかった。

これだけの理由ならなにも関西学連各校が、歩調を合わせて不参加となる理由にはならないからである。

おそらく、表面に出さない〃理由〃があったのではなかろうか。そうだとしたならば、純粋であるべき学生の選手権大会に一大汚点を残したといってよい。今回の関西各校の態度は軽率である。

もし関西各校の持つ〃理由〃が学生界発展のために益ありとするものならば、堂々とそれを天下に公表し論争すればよい。せっかく地方で開いた学生選手権を、東西の強豪チームが集まって祝福できなかったことは後日に悔いを残すことになる。今回の関西学連の態度はまことに遺憾といわねばならない。（神奈川・都築生）

不参加の真因追及を

関西学連の全日本学生選手権ボイコットは、理由の如何を問わず全日本学連として徹底的に追及すべきである。

学生チームにとって全日本学生選手権は、年間最大の目標であるはずだ。それをいかなる理由にしろ、一校、二校ならいざ知らず、全チームがそろって棄権するなどは弁解の余地は全くない。

関西学連不参加の理由が新聞紙上に伝えられた通りならば、大会開催地を前年に決める必要も意味もなくなるではないか。

全日本学連はその権威のためにも関西各校不参加の真因を追及すべきである。関西学連各校に全日本学連としての処分をも公けにすべきである。（長野・一OB）

幼稚な関西側の理由

東西学連の対抗意識がグラウンドから飛び出して感情的なものになったのが、今度の全日本学生への関西不協力騒動だろう。

関西側にも言いたいことがあるのだろうが、今回はあまりにもその理由が幼稚でお話にならない。伝統的な名門の多い関西学連としてはその軽卒が惜しまれる。

（兵庫・木下生）

球界にも反省の要あり

おそらく貴誌の今月の投書係には、関西学連の全日本学生選手権不参加に対する投書が数多く寄せられると思います。

そしてその多くは関西学連への批判にあると思います。私自身も今回の関西学連を軽卒な態度だったと思うのです。

しかし、果して関西学連に加盟する十五チームの学校がいずれも「経済的な理由」と練習不じゅうぶん」という同一無二の理由だったのでしょうか。その理由で不参加を決めた大学もあるにはあったでしょうが、関西学連全体の問題として「全日本学生選手権に参加したくない」理由があったのではないでしょうか。

私が関西学連を先に軽卒だと言ったのはその〃真の理由〃を公けにしなかった点を指します。

その理由は学生らしく堂々としたものだったと思います。そうであってほしい。いずれにせよ、それを正面に押し立てていくべきだったと考えます。

現在協会は国際選手の選考にしても何にしても東京中心に動きすぎているようです。学連においても、昨冬に計画された全日本学生室内が関東側の反対で立ち消えになったと聞いています。

そうしたことに対する一つの反抗が、今回の不協力（不参加）の導火線になったとしても私はそう不自然に思えないのです。

また関西学連は以前から全日本学生と全日本学生王座という二つの〃学生NO１〃の決定に疑義を抱いているようにも聞いています。そうした意見調整が不備だったのも、今回の事態を引き起す遠因となっていたのではないでしょうか。

いずれにせよ、感情的なシコリを残さぬよう問題の収拾を望みたい。それと同時に全日本学連も、また本協会も、関西学連がなぜ参加しなかったかを考えてみてほしい気がします。（静岡・G・T生）

★係から――この問題に関する投稿採用は一応今号限りにしたいと思います。

★　今号のみ「質問欄」は休みます。

編集後記

▽…世界選手権に参加した女子チームが元気で帰国した。話をいろいろ聞くと、日本が負けたのはデフェンスがあまりにも弱かったという。攻撃力は5本のユビにはいるそうだから、次期大会までにはデフェンスを強化してもらいましょう。

小倉の座談会には熊本の北川先生、西村八千代君に出てもらいました。熊本の実家に帰るのを一日延ばしてもらい、いろいろ有益な話しを聞きました。

▽…仙台の全日本学生選手権に関西学連が出場せず、大きな問題となってしまった。当時者にしてみれば、じゅうぶん話し合いはしたのだろうがどうもすっきりしない。投書欄にもあるように関西学連の態度はオカシイ。真相を書くことは球界のためにプラスにはならないが、やっぱり真相を知りたいものです。

▽…小倉のインターハイで京都女子高校の植山絹子選手が試合中に左足を骨折して入院した。地元の小袋先生は手ぎわよく切り回し、10分後にはフトンから一切合切集まり、監督の白取先生をよろこばせた。小袋先生には心からお礼をいいます。炎天下のゲームにも負けず男女とも好ゲームを展開した。桜台が久しぶりに優勝した。稲石監督のエビス顔は、今でも筆者のマブタに映ります。神代高の健闘は大会随一だった。菊池農蚕高もよかった。

▽…全日本高校（男子）選抜チームが韓国に遠征した。詳報は次号に掲載します。

（ふく）

日本ハンドボール協会編
ハンドボール　第十一号
昭和三十七年[illegible]二十五日印刷　発行所　東京都千代田区神田駿[illegible]四ノ六
昭和三十七年[illegible]月三十日発行　日本ハンドボール協会　電話(251)九五一一〜五　振替東京五八三四八番
編集兼発行人　高嶋冽
定価五十五円(〒)二十円